

東欧史研究オーラル・ヒストリー vol. 2

伊東孝之氏インタビュー 第2部

東欧における体制転換 ― 体験と思索

東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会編



東京外国語大学・海外事情研究所

2026 年

東欧史研究オーラル・ヒストリー vol. 2

伊東孝之氏インタビュー 第2部

東欧における体制転換——体験と思索

東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会編



東京外国語大学・海外事情研究所

2026 年

第2部 目次

■伊東孝之氏インタビュー	5
5. 留学時に体験したポーランド、ソ連、東西ドイツの状況や それぞれの違い、冷戦の最前線に留学されて印象的だったこと	5
(西) ドイツ ...5 ／ ポーランド ...11 ／ 東ドイツ ...18 チェコスロヴァキア ...19 ／ ソ連 ...20	
6. 体制転換によってポーランドやロシア、ドイツで変わったこと、 変わらなかったことについて、何を感じた／感じるか	41
ドイツ ...41 ／ 東欧諸国 ...43 ／ ロシア ...46	

■第1部目次

はじめに

1. 個人的動機：東欧（史）を研究することになったきっかけについて
2. 学生・院生時代（1960年代）の社会的背景
 ——日本に伝えられた「東側」の像
3. 戦後日本における東欧研究と大学院時代
4. ドイツ留学の経緯（1960年代後半）

■第3部目次

7. 先生がおられた頃の北大スラ研の様子について（1972～1993年）
8. 早稲田大学での仕事と次世代教育について（1993～2012年）
9. 現在の東欧（史）研究の在り方と研究に際して重視してきたこと
10. ウクライナ情勢の今後と現在の活動についての展望

■編集に際しての特記事項

- ・第1部「はじめに」にもあるが、本書各ページの脚注はインタビューの伊東孝之氏が記した注であり、注番号は算用数字で示している。一方、本書各部の末注（注番号は小文字のローマ数字）は編者の東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会による編集注である。
- ・本書の注番号は、脚注・末注ともに第1部からの通し番号である。
- ・本文中の丸括弧（ ）はインタビューによる補足、亀甲括弧〔 〕は編者による補足である。
- ・本文中の地名表記は、原則として、インタビューの表現・表記に基づいている。

インタビュー：

5. 留学時に体験したポーランド、ソ連、東西ドイツの状況やそれぞれの違い、冷戦の最前線に留学されて印象的だったこと

時系列で叙述を進めた方が理解しやすいと思われます。先に修士論文を提出したあとで何をすべきかの選択に苦しんで、ドイツ留学を選んだ話をしました。その後4年間西ドイツに留学し、帰国後、北大スラ研に就職しました。スラ研に20年勤務したあと、早稲田大学に招かれ、同じく20年を勤めて、定年退職しました。これが私の大まかな職歴です。

その前に、自分の海外滞在の経歴を大雑把に見ておきたいと思います。ポーランドを専門に研究したのでポーランド滞在、いや留学経験が長いと思われていますが、実はあまりないのです。厳密な意味では「留学」していません。西ドイツ留学中から何度も1～3ヶ月間の滞在をしたことはあります。その後も断続的にポーランドに足を運びましたが、いずれも長期ではありません。最も長期に滞在したのは早稲田大学に移ったあとの2001年の6ヶ月です。併せて1年半ほどになるでしょうか。

ロシアには西ドイツにいたときにすでに10日ほど旅行したことがありますが、長期に滞在したのはスラ研に赴任したあと1978～79年でした。これは日本学術振興会とソ連アカデミーとの交換協定に基づいた研究滞在でした。早稲田大学に赴任したあと、早稲田大学とモスクワ大学の交換協定に基づいて2001～02年に半年間ロシアに滞在しました。

このほか長期のものとしては1983～84年にベルリン自由大学に客員講師として招かれ、また2000年10月から半年間スイス・チューリヒ大学にやはり客員講師として招かれました。結局ドイツ語圏滞在が一番長かったことになります（5年半）。

それ以外の諸国へは学会などへの参加の機会に訪れただけです。アメリカは1975年に2ヶ月間米 국무省に招かれて、アメリカの主なソ連東欧研究センターを視察する経験がありました。しかし、それ以外には断続的に、いずれも学会などで短期間滞在しただけです。イスラエル、中国など他の諸国も同様です。

【(西)ドイツ】まず、ドイツ留学の話から始めるのが妥当でしょう。前記のような事情で、ドイツの留学先は西ベルリンとなりました。生まれてはじめての海外渡航でした。DAADによる留学は通常2ヶ月の語学研修が含まれます。ドイツ各地にゲーテ・インスティトゥートの支部があり、私が配属

【表 1】伊東の主な移動先（1968 年 8 月～ 2012 年 3 月）

移動の性格	滞在先 (国・都市)	財源	開始時期 (年・月)	終了時期 (年・月)
留学	(西) ドイツ・ ベルリン自由大学	DAAD	1968.08	1972.09
研修旅行	ソ連・モスクワ	自費	1969.07	1969.07
語学講習	ポーランド・ワルシャワ	自費	1969.08	1969.09
文書館調査	ポーランド・ワルシャワ	DAAD	1971.07	1971.10
赴任	札幌・北海道大学	北大スラ研	1972.10	1993.04
視察	米国・ スラブ研究センター視察	米国務省	1975.10	1975.11
研究	ソ連・ 科学アカデミー	日本学術振興会	1978.09	1979.08
出講	(西) ドイツ	ベルリン自由大学	1983.09	1984.08
赴任	東京・早稲田大学	早大政経学部	1993.03	2012.03
出講	スイス・チューリヒ	チューリヒ大学	2000.09	2001.03
研究	ポーランド・ワルシャワ	早稲田大学	2001.04	2001.09
交換	ロシア・モスクワ	早稲田大学	2001.10	2002.03

※記載は網羅的でも正確でもない。もっぱら記憶にしたがって記入した。単なる旅行、研修旅行、学会出張などは数多くあったが、省いた。多くの行く先はポーランドだった。

されたのはハノーファーの近くのリュネブルグ（ハノーファーとハンブルクの真ん中あたり）でした。1968 年 8 月 15 日か 16 日（と記憶します）にアンカレッジ、フランクフルト経由で、リュネブルグに向かいました。

1968 年は世界が非常に不安定な年でした。日本と韓国は毎日のように学園紛争で騒がしかったです。米国、西ヨーロッパ諸国も各地で学園紛争が起きました。東欧ではポーランドとチェコスロヴァキアで自由化運動が起きていました。とくに「プラハの春」は国民運動となっていました。私がリュネブルグに語学研修に来て数日後にワルシャワ条約諸国軍がプラハに侵入しました〔編集註：8 月 20 日〕。西ドイツとチェコスロヴァキアは国境を接しており、国境のすぐ向こう側での出来事でした。ドイツのテレビも新聞も毎日のように大騒ぎでした。ゲーテ・インスティテュートでチェコスロヴァキアからの留学生とも知り合いとなりましたが、たいへん不安そうでした。急に東欧が身近に感じられました。10 月初めにハノーファーからベルリンに飛びました。当時、西ドイツから西ベルリンには鉄道、車（アウトバーン）、飛行機のいずれでも行くことができましたが、たしか最初は飛行機で飛んだように記憶します。

ドイツでは一つの都市に一つの大学という伝統がありましたが、ベルリンは第二次世界大戦後東西に分裂したために、本来のベルリン大学は東ベルリンにあって、「フンボルト大学」と呼ばれまし

た（森鷗外が留学した大学）。どの大学も正式には都市名ではなく、創立者などの名前をとってなんとか名称大学というのですが、一つの都市に一つという原則が守られていると、長くなって面倒なのでその都市の名前だけで呼ぶことが多いです。ベルリンだけは第二次世界大戦後二つできましたので、東ベルリンにある古くからの大学を本来の名称で呼びました。

私が留学したのは戦後西ベルリンにできたベルリン自由大学でした。ベルリンは「四ヶ国都市」と呼ばれたことがあります。それはソ連、アメリカ、イギリス、フランスの四つの占領地域からなっていたからです。西ベルリンはそのうちの西側3ヶ国の占領地域を一緒にしてできました。自由大学は郊外のダーレムという高級住宅街にありました。アメリカ式にキャンパスを形成することではなく、住宅街の中に分散してありました。創立に当たってはアメリカの資金が多く投入されたらしいですが、管理運営は完全にドイツ側に任されたようです。のちに西ドイツを旅行して、マールブルグとかハイデルベルグのようなドイツの古い大学を知ることができて、ベルリン自由大学の特殊性を知りましたが、大学の性格としては完全にドイツ式で、ドイツの文部省のもとにあり、ドイツの大学システムに統合されていました。

西側起源だからといってけっして保守的な大学ではなく（マックス・ウェーバーの時代にしばしば「決闘」の舞台となったように、ドイツの古い大学では学生寮での人間関係が世代を超えて継承され、これがドイツの保守主義の一つの基盤となったと言われる）、周知のように創立以来ドイツというか、むしろヨーロッパ全体の学生運動のリーダー格的存在をなしていました。なぜそのようになったかを一言で説明するのは難しいですが、一つには旧東ドイツ地域から亡命してきた学生が多かったことです。私が留学した1968年の5月に（学生運動に反対する人物によって）銃撃されてその後完全には回復することなく若死にした学生運動の指導者ドゥチュケ (Rudi Dutschke, 1940-79) もその1人でした。もう一つは、西ベルリンは西ドイツと違って徴兵義務がなかったもので、徴兵を嫌って西ドイツから逃げてきた学生が多かったことです。多くの場合、彼らが学生運動のリクルート源となりました。私がベルリンにやってきたとき、ドゥチュケ狙撃事件の煽りを受けて、学園は騒然としていました。多くの学部や学科がストライキで学生に占拠されていました。私は東大紛争のまっただ中からやってきましたが、ベルリンでも学園紛争に巻き込まれる感じでした。どういふものかベルリンの学園紛争の一つの中心をなしたのは日本学科でした。主任教授が元ナチス黨員だったとかいわれて、学生が反乱を起こしたのです。その後任にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学から招かれたのが加藤周一先生でした（夫人はオーストリア系のドイツ人で、ベルリンに来てから離婚してしまいました。夫人のためにドイツを選んだとすれば誤算だったようです）。私はすぐその講義を受講するようになって、日本学科の雰囲気も知ることができました。

私がベルリンに来て最初に住んだのはベルリン自由大学直属ではなく、大学から独立した大きな学生寮でした。西ベルリンにはベルリン自由大学だけではなく、工科大学、商科大学、教育大学、

芸術大学、音楽大学などいろいろな大学があって、そうした大学の学生と一緒に住んでいました。ドイツ人だけではなく、多くの外国人学生が住んでいました。学生寮はほぼ完全に学生の自治に委ねられていて、ドイツでは学生自治がいかに行われるかを観察することもできました。学生運動も盛んでした。戦後にできた大学なので寮も新しく、ドイツの学生寮によくある保守的な伝統がありませんでした。この学生寮はベルリン自由大学からやや遠かったので、私は1年ほどして大学の近くにあるプロテスタント教会系の小さな学生寮に移りました。この学生寮はバーダー・マイnhof・グループ (Baader-Meinhof-Gruppe) と呼ばれる、のちにテロリスト化した学生運動 (ドイツ赤軍派) の根拠になったといわれますが、私が移り住んだころはもうその影響がありませんでした。一般に日本の学生運動に揉まれてきた私の目からすると、ドイツの学生運動は若いというか、幼いところがありました。マルクスの理論も十分に咀嚼していない感じがしました。

私が日本にいるころにベルリン自由大学で指導教員に選んだのは、のちに述べる通りリヒャルト・レーヴェンタール¹⁸ でした。この指導教員選びは間違っていたと思います。というのは、私がドイツを選んだのは方便だったからです。ドイツを選びましたが、指導教員としてドイツのどのポーランド研究者かは選びませんでした。というか、まったく知らなかったもので、選ぶこともできなかったのです (笑)。たまたまレーヴェンタールは著作を一つだけ読んでいたような気がします。それで名前を挙げ、本人にも依頼の手紙を書いたのですが、それだけでした。その著作もポーランドに関するものではなくて、ソ連の外交政策に関するもので、独ソ関係の文脈でした。非常に著名な人物でしたが、それだけに多忙で、細かな論文指導を期待することは難しかったのです。実際にドイツに行っても、ほとんど研究室を訪ねることがありませんでした。指導教員とドイツ語で議論できるほどになるまでには1年半以上かかりましたし、とにかくドイツで、ドイツの大学で東西南北の見当をつけることに忙しかったのです。これが英語諸国だったらだいぶ事情が違っていただろうと思います。あとから考えると、レーヴェンタールは「マックス・」ウェーバーの弟のアルフレート・ウェーバー (Alfred Weber) やカール・マンハイムに師事していたということなので、たいへん惜しいことをしたと思います。

ベルリン自由大学は主な学部が研究所を名乗っていました。たとえば、政治学部はオットー・ズーア¹⁹ 研究所 (Otto-Suhr-Institut)、歴史学部はフリードリヒ・マイネッケ研究所 (Friedrich-Meinecke-Institut) でした。この他に東欧研究所 (Osteuropa-Institut) がありました (後述)。東欧研究所に研究室をもっている教員はおそらくディシプリン上では別々の学部、たとえば歴史学部、政治学部などに所属していたのだと思います。しかし、ロシア東欧研究者がすべて東欧研究所に所属したわけで

¹⁸ リヒャルト・レーヴェンタール Richard Löwenthal (1908-91)。ドイツの政治学者。1961年から1974年までベルリン自由大学で教授を務めた。

¹⁹ オットー・ズーア Otto Suhr (1894-1957)。ドイツ社会民主党の政治家。ナチス政権下で抵抗運動を行う。1948～55年にドイツ政治学専門学校 (Deutsche Hochschule für Politik) の学長となる。1955年からその死までベルリン市長。ベルリン自由大学はドイツ政治学専門学校を政治学部として吸収するとともに、ズーアは同大学初の政治学教授となる。

はありません。たとえば、レーヴェンタールは所属していませんでした。しかし、もう1人のオサチューク＝コラブ (Bogdan Osadczuk-Korab, 1920-2011) は東欧研究所に研究室をもち、オットー・ズーア研究所にはもっていませんでした。これが何を意味するかは今でもよく分かりません。伊東は東欧研究所にはよく通いましたが、オットー・ズーア研究所にはどうも慣れ親しむことができませんでした。

東欧研究所でとくに親しく指導してくれたのは、実はロシア史研究者でした。1人はヴェルナー・フィリップ²⁰、もう1人はハンス＝ヨアヒム・トルケ (Hans-Joachim Torke, 1938-2000) です。今から考えてみると、フィリップ教授のゼミに参加したのがよかったと思います。半年間ゼミに参加することによって、教師とゼミ生は互いによく知りあうようになります。トルケはそのときゼミを手伝う立場にありました。そのおかげで私はフィリップにもトルケにも自宅に招かれるような関係となりました。彼らと一緒にロシアに旅行したこともありました。レーヴェンタールとは残念なことにそのような関係を築くことができませんでした。

東欧研究所のもう1人の教員、オサチューク＝コラブは学界ではほとんど無名でした。日本にいたころは彼のことをまったく知りませんでした。しかし、気がついてみると私のテーマにもっとも近い研究をしている教員でした。ウクライナ人ながらポーランドで生まれ、育ち、戦時中にベルリン大学で勉強し（ウクライナ人は戦時中だいたい親ドイツ的でした）、戦後もずっとドイツにとどまりました。一貫してウクライナの地下運動、またポーランドの地下運動と連絡をもち、ソ連・東欧諸国の内部事情に精通したジャーナリストとして活動しました。スイスの『ノイエ・チュルハー・ツァイトUNG』紙の常連コラムニストでした。西ヨーロッパの亡命誌にもしきりに寄稿しました。しかし、アカデミズムとはあまり関係がなかったように思います。学界ではほとんど知られていませんでした。どうもそれまで私講師 (Privatdozent) のような資格で大学に籍をおいていたようですが、博士候補生をもっていたという印象は受けませんでした。私がベルリンに来たとき、ちょうど1930年代のピウスツキの対独予防戦争計画について論文を提出したところでした。おそらくその論文で教授資格を認められ、博士候補生も採用することができるようになったと思われますが、私はそのことを知りませんでした。たとえ知ることができたとしても、彼がはたしてアカデミズムの人かどうかを見極めることはできなかったでしょう。

彼のドイツ語が文法的にほとんど完璧で、口述筆記しても活字になるくらい立派であるという点では評価されていました。他方でポーランドやソ連の共産党政権からは敵視されていることも明らかでした。彼を指導教員に選ぶことができるかどうかを知りませんでした。私はあえてその話を切り出しませんでした。レーヴェンタールから彼に指導教員を変えたとなると、東側諸国に入国するのが難しくなるという心配もありました。今から考えると、これは杞憂でした。いずれにせよ東側諸国

²⁰ ヴェルナー・フィリップ Werner Philipp (1908-96)。ドイツの歴史家。ベルリン自由大学の東欧研究所 Osteuropa-Institut の創立に関わり、1951年11月の設立当初から所属した。

にとってはレーヴェンタールの方がずっと怖かったでしょう（笑）。

私がベルリンで4年間にやったことはなんだったのか。具体的な形として残っているものは、スラ研の紀要に発表した日本語の論文です（ローザ・ルクセンブルクの民族問題論、戦後ポーランドの成立論）。いずれも全力を尽くして書いたつもりですが、前者は修論の副産物、後者も日本でかなり準備していた研究でした。たしかにベルリンやポーランドで新しい文献や資料を大量に補充することができましたが、発想は基本的に日本時代に遡るものでした。しかし、考えてみると、留学は私にとって博士論文を書くまでの時間稼ぎであったので、その意味では目的を達成したといえるように思います。

——ドイツで4年間勉強されていたときに、ドイツ語で出されていたポーランド研究の成果は当時の先生のご研究にどのように役立ったのでしょうか？

それは非常に重要なポイントだと思います。私は4年間ドイツにいましたし、ドイツで出たポーランド現代史に関する本をそれなりに読んだつもりですが、ファクトの研究としてはかなり恩恵がありましたが、とくに大きなインスピレーションを得たことはないように思います。そんなことを言うと、ドイツ人に対してはたいへん申し訳ないですが。それは何といったらよいか、ドイツの場合は、どちらかといえば歴史研究が中心であって、私自身も歴史研究なんです。アメリカの場合は、先ほどちょっと触れたような社会学的な概念が組み込まれていることが多いです。それは政治学を含めての話です。どちらかというと私はそちらの方に惹かれるようなところがありました。

一つだけ、ローザ・ルクセンブルクの研究していたときの体験を紹介したいと思います。ネトル (J. P. Nettl)²¹ という研究者がいますね。ローザ・ルクセンブルクの伝記を書いた人です。彼はたしかチェコ生まれのユダヤ人で、ポーランド語だけではなく、イーディッシュ語とかドイツ語とかロシア語とか、地域のほとんどの言語に通じています。かつ彼は社会学の専門家なのです。社会学の専門書も書いています。彼のポーランド研究、ローザ・ルクセンブルク研究からは、私は非常にインスピレーションを受けました。ああいうタイプの研究がドイツでは少なかったように思います。

一つだけ、後になって、ローザというか、ローザの党のレーニンとドイツ社会民主党との関わりを描いた大著がドイツ語で現れました (Georg W. Stöbel, *Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und die SPD. Der polnische „europäische“ Internationalismus in der russischen Sozialdemokratie*, Wiesbaden, 1974)。シュトローベル (Georg W. Stöbel, 1923-2010) は当時ポーランド領だったウクライナのリヴィウ生まれです。

²¹ J. P. Nettl, *Rosa Luxemburg. The Biography*, London: Oxford University Press, 1966, 2 vols. 著者ネトル (1926-68) はウィーン出身、1936年にイギリスに移住し、第二次世界大戦中にイギリス軍の情報機関で勤務した後にオックスフォード大学で学び、1968年にアメリカ合衆国で、飛行機事故で弱冠42歳で亡くなっている。生まれたのはたしかボヘミアで、まもなく両親とともにウィーンに移住した、と伊東はどこかで読んだ記憶がある。

リヴィウはそのしばらく前までオーストリア領だったので、おそらくドイツ系だったのでしょう。ドイツで教育を受け、もっぱらドイツ語で業績を発表しています。しかし、もちろんポーランド語、ウクライナ語、ロシア語に堪能です。主著はポーランド、ドイツ、ロシアの社会民主党の相互関係とそれぞれの党内論争を細かく、時系列的にフォローしたもので、たいへん高水準の研究です。しかし、ネトルに見られたような社会学的な関心はほとんど見られません。伊東は著者と個人的に研究について意見を交換したことがあります。

それ以外は、ポーランドに関してはどちらかというともうポーランドの方が、研究水準が高くて、学ぶことが多かったように思います。ポーランド語ができるようになると、別にドイツの研究を経由してポーランドを研究するという必要が少なくなったような気がします。社会学の問題で言えば、ポーランドは社会学的研究が非常に発達している国です。いろんな分野で、歴史学分野も含めて、社会学の影響が強いです。いろんな論争があって、私自身も面白いと思いました。何も、ポーランド研究で、ドイツの研究者の助けを借りなければいけないということはなかったような気がします。

もちろん、冷戦時代は、「社会主義国の研究」というのはかなりバイアスがかかっていましたから、それをチェックするという意味ではドイツの研究は大切でした。ドイツの研究は、非常に保守的な、古いタイプの歴史学研究が多かったですが、役に立ちました。ポーランドに関して言えば、研究者自身に社会主義国のマルクス＝レーニン主義のステレオタイプからは外れたオリジナルな研究者が多かったです。そういうことではドイツの研究に対してもなんら遜色がなかったように思います。

【ポーランド】次に、必ずしも訪問した順に従ってではなく、ポーランドから述べることにします。ポーランドは自分の専門に近いということもありますが、ポーランド・コネクションで他の諸国にコンタクトが広がったという事情もあるので、ポーランドから先に話した方があとの話との関連で役に立つと思います。

ベルリンは交通の一つの結節点です。パリからモスクワに行く列車がありますが、これはベルリンを経由します。ベルリンからプラハやその先のウィーン、ブダペシュト、ベオグラードなどに向かう列車も出ています。私はその後何度もこのルートを利用してワルシャワやプラハだけではなく、パリ、ロンドン、モスクワ、ウィーン、ブダペシュト、アテネなどに行くこととなります。ワルシャワまでは450kmくらいで、4時間くらいで行けるはずですが、途中で国境がありますので、当時6時間半から7時間ほどかかったように記憶します。それでも当時三重県の実家から東京まではほぼ同じ時間がかかったので、たいへん近いと感じました。

ワルシャワ大学にポロニウム (Polonicum) という教育機関があって、毎年外国人向けの1ヶ月のポーランド語研修コースを実施していました。のちに知りましたが、他の東欧諸国にも似たような研修機関・コースが設けられており、ソ連からも大量の参加者があったようなので、どうもソ連・東欧諸国

の間に申し合わせをしていたのではないかという気がします。つまり、語学研修コースの開催はその国だけの政策ではなくて、ソ連・東欧ブロック共通の政策でした。というのは、ソ連・東欧諸国間では個人、とくに教育課程にある学生が自分の意志と費用で動くということはほとんど不可能だったからです。ただ西側からはもちろん自費で参加するしかありませんでした。私は1969年8月にそのコースに参加しました。たしか全体で150人ぐらいの各国からの参加者がいました。多かったのは米ソからの参加者（それぞれ30人くらい）でしたが、西欧諸国や東欧諸国からもいました。ドイツ人は東西ドイツだけでなく、オーストリア、スイス、オランダのようなドイツ語圏諸国からも来たので、ドイツ語を母語とする者は人数では一番多かったかも知れません。西側、とくにアメリカからの参加者の多くは移民の子弟で、両親とはラフなポーランド語を話すが、きちんとしたポーランド語が話せないで、思い切って勉強に来たというものが多かったように思います。他方で本格的なスラヴ学者もいました。

日本からの参加者もいました。1人は旧知の中央大学の宮島君で、彼は既に2、3ヶ月前にワルシャワ大学にいて、参加したのです。もう1人は小山真理子さんでした。小山さんは初対面でしたが、聞いてみると小山弘健というマルクス主義理論家（戦前から有名な経済学者、歴史家、軍事思想家）の娘さんで、女優の小山明子さん（大島渚の奥さん）の従姉妹でした。ウッチの映画大学に通って映画監督になる夢をもっていました。実際にウッチの大学に入学しましたが、どういふものか卒業を目前にして学業を中断してしまいました（帰国して翻訳家となりました）。

はじめてのポーランド滞在は私にとって見るもの、聞くものすべてが珍しかったです。しかし、交流はほとんど研修参加者に限られていました。あるポーランド語の授業で、たしかアメリカから来た学生が女性教師に、「カティンの森」事件をどう思うかと尋ねたのを覚えています。私はドキッとしましたが、教師はそういう質問には慣れていた様子で、真相は分からないと答えました。ナチス・ドイツがやったと言わなかった点が公式見解からはずれていましたが、ソ連がやったとも言いませんでした。実はポーランドでは前年の1968年に「三月事件」という知識人の反乱が起こり、国内の政治体制が動揺していました。語学講習が行われた1969年の末には「十二月事件」が起き、ゴムウカ政権が崩壊しましたⁱⁱ。しかし、講習の参加者にはそうした国内政治の動きはまったく見えませんでした。われわれはポーランド語がまだ十分にできなかったので、外のポーランド社会と交流するよりも、相互の間に交流することに忙しかったのです。ほとんどが20代初めの青春期にあり、国家の枠を越えての交流には何の支障もありませんでした。身振り手振りのほか、怪しげな英語、独語、ロシア語などを操ってなんとか意思疎通させました。そのために肝心のポーランド語の学習にはあまり身が入りませんでした。

社会主義国の政府が準備した語学コースでしたが、そこでかなり自由な交流ができて、良かったと思います。のちにロシア人とこの研修が終わった後で話しあう機会がありました。その女性が言う

には、あれは非常にエロチックなセミナー、語学コースだったそうです。私は関係がなかったのですが、彼女は、誰と誰がくっついてという話を延々とししました（笑）。つまり、国際交流なのですが、国際男女交流のようなところもあって…（笑）、大体 20 歳前後でしたからね。私は 26 歳から 27 歳ぐらいでしたので、もうすでに年寄りでしたが、彼らは 20、21 歳でした。社会主義国の場合は、大学が、つまり国家が派遣したのでしょう。あの体制では自分の意思で国外に出ることはできませんでしたし、そもそもそのためのお金もありませんでした。東ドイツからも来ていましたが、やはり 20 歳ぐらいでした。みんな仲良くなりました。国境や国籍を超えて仲良くなるよい機会だったと思います。しかし、肝心のポーランド語については、ほとんど役に立ちませんでした（笑）。

1971 年 7～10 月にはもう一度ポーランドを訪れる機会がありました。私が奨学金を受けていた DAAD は定期的に係官を派遣してきて、奨学生とのコンタクトを取っていました。私はその機会にポーランドの文書館、図書館で仕事をしたいと申し出たら、それなら 3 ヶ月間の奨学金を出しましょうという気前のよい提案をしてくれました。アメリカから日本に来た留学生が文部省に北朝鮮に行きたいので金を出してほしい、と言うようなものでした。ビザのためには受け入れ大学、受け入れ教員が必要でしたが、宮島君が世話になっていたワルシャワ大学歴史学部のガルリツキ (Andrzej Garlicki, 1935-2013) 教授が引き受けてくれました。ビザは西ベルリンにあった戦後処理の名残りである「ポーランド軍事使節団（当時の政府の外交代表）」に申請して受けることができました。ワルシャワに着いて真夏の暑い日に指定されたガルリツキ教授の父親の家に行ってみると、パンツ一つの老人が迎えに出てくれました。リヴィウ出身の弁護士で、両大戦間期からポーランド社会党 (PPS) の弁護を買って出たということで有名な人物でした。伊東はこの初対面の印象からポーランド人に非常に人間的なものを感じました。この頃のポーランドは、十二月事件でゴムウカからギエレクへの政権交替があったあとで、比較的リベラルな空気が支配していたことも関係しています。

ワルシャワ大学は宿泊先として郊外にある学生寮を仲介してくれました。これはポーランド社会との接触を図る上で、非常に有り難いことでした。私には非常に広い部屋を割り当ててくれたので、ポーランドの住宅事情はよいのだなと思いましたが、大間違いでした。この寮では 6 人で一部屋を共有していた（つまり、当時の東大駒場寮と同じ）が、外国人である私が来たのでまる一部屋を空けてくれたのでした。しかし、そのうちに隣の部屋からポーランド人が 1 人、また 2 人と来て、話し合う機会をもちました。その後、秘密警察にひどい目に遭わされた時も、愚痴をぶちまけるといろいろと励ましてくれました。

そのうちの 1 人がウクライナ人でした。彼はいかにポーランドでウクライナ人がひどい差別に遭っているかを熱心に語りました。ポーランドのウクライナ人問題についてはかねがね聞いていましたが、直接その被害者に会うのは初めてでした。第二次世界大戦中、ドイツの占領下でポーランド人とウクライナ人の間に内戦が起きて、十数万人の死者が出ていました。戦後ポーランド領となったとこ

ろにウクライナ人が残っていて、1948 年くらいまで抵抗運動を展開していました。共産党政府の大
臣の 1 人が殺されるということもありました。そこで、当時の政府はウクライナ人をドイツから割譲さ
れた地域に分散移住させる政策を展開しました。それがウクライナ人にとって非常に不満で、長い
間抵抗を続けたのです。彼も実はこの政策の対象となった家族の一員でした。私に対してもポーラ
ンドのウクライナ人政策についてもものすごい憤懣を漏らしました。

滞在の目的は 1920 年のソヴィエト＝ポーランド戦争中のポーランド共産党の新聞を読むことでし
た。ソ連領になるかポーランド領になるかわからない地域があって、そうした地域の新聞を読みた
いと思ったのですが、そのような史料はポーランド統一労働者党 (PZPR)、つまり共産党ⁱⁱⁱ の付属図
書館にしかありませんでした。それは都心部の国会 (Sejm) の近くにあったので、私は毎日市電か
バスに揺られて通いました。党史研究所は党中央委員会付属で、ふつうの人々が近づかない施設
でした。どんなに恐ろしいところかと思いましたが、想像していたのとまったく逆で、非常に紳土的
で親切なところでした。私のどんな質問にも答えてくれ、必要な史料へのアクセスを許可してくれま
した。

のちのこととなりますが、ローザ・ルクセンブルク研究の関係で私が懇意となり、多くの助けを得
たティフ²² は同じ党史研究所の研究員でした。何度も自宅に招かれ、夫人ルツィナ (Lucyna) さんの
手料理の馳走に与ったこともあります。さらにのちになって知りましたが、驚いたことにこの夫人は
1950 年代半ばまで党政治局の実力者であったベルマン (Jakub Berman, 1901-84) の娘さんでした。
私がこのことを知ったのは、パリで発行されていた亡命誌『クルトゥラ (*Kultura*)』を読んでいたとき
でした。ティフが引用されていて、そこに “zięć Bermana” (ベルマンの女婿) とあったからです。当時、
“zięć” という言葉を知らず、字引を引いたことを覚えています。本人も夫人も実にオープン・マインディ
ドで、リベラルな人物でした。実はベルマン自身もトランスカ (Tereza Torąńska) による『彼ら』とい
うタイトルのインタビュー記録²³ を読むと、意外にリベラルな人物であったことが分かります。ベルマ
ンが助言したスターリン主義時代の党指導者ビエルトは、最悪の独裁者であるといわれていますが、
実はその娘ヤシンスカ＝カーニャ (Aleksandra Jasińska-Kania, 1932-) は社会学者バウマン (Zygmunt
Bauman, 1925-2017) の教えを受けて、博士論文を書いてワルシャワ大学の教授となっています。市
場経済における「人間疎外」現象の研究者です。彼女はビエルトという名前が嫌だったので、違
う名前を名乗ることにしました。それを父親が許してくれたことも回想録に書いています²⁴。共産党
系の知識人（ユダヤ系が多い）は民族主義的なポーランド人の間で忌み嫌われていましたが、実
はポーランド社会の中で最も親西欧的な分子であることを、私はだんだんと知るようになります（な

²² フェリクス・ティフ Feliks Tych (1929-2015)。ポーランド統一労働者党 (PZPR) 中央委員会付属党史研究所研究員。

²³ Teresa Torąńska, *Oni. Stalin's Polish Puppets* (London, Collins/Harvill, 1987)。

²⁴ Krystyna Naszkowska, *Wywiady: My, dzieci komunistów*, Warszawa, Wydawnictwo Czerwone i Czarne, 2019, quoted in: *Gazeta Wyborcza*, 2019.5.10, <https://www.wysokieobcasy.pl/wysokie-obcasy/7,152731,24770659,aleksandra-jasinska-kania-kiedy-w-szkole-roznioslo-sie-ze.html> (2025.1.7 最終閲覧確認)

おビエルトはユダヤ人ではありません)。

しかし、こうしたことと並んで、私はこのときに苦い経験をします。私はベルリンからオンボロのフォルクスワーゲンを運転してワルシャワに来ていましたが、グルエツというワルシャワ郊外の宮島夫人の生家を訪れて、夜遅くワルシャワに戻ろうとしたとき、自動車事故を起こしました。前方に麦藁を満載した馬車を認めて慌てて衝突を避けようと急ハンドルを切ったら、ハンドルが効かなくなって、そのまま道路から転落してしまいました。幸い命拾いし、誰にも迷惑をかけなかったのですが、麦畑で車が転覆し、そのまま燃えてしまいました。このとき警察が車を調べて、私のアドレス帳を発見しました。その中にベルリンで知ったインド人の研究者、ライナ (Peter Raina, 1935-) の住所があるのを警察は見逃しませんでした。私は彼との接触をなるべく避けていました。彼はオックスフォード大学を出たあと、ポーランドの社会主義に憧れてワルシャワに留学し、そのときに集めた情報に基づいて西側でゴムウカの伝記を発表したのです。ポーランドを追放されてベルリンに来ていましたが、ワルシャワ時代に工藤幸雄夫妻と親交があって、夫人がベルリンにやってきたときに一緒に会うことになりました。そのときにたまたま私の手帳にアドレスを書き込んだのを警察が発見したのでした。これ以後、私は秘密警察につきまとわれる身となりました。リベラルな空気が支配していたとはいえ、やはりなお権威主義体制の国であって、不愉快な思い出が残りました。

しかし、この3ヶ月間は私の研究生生活における一つのブレークスルーでした。ベルリンに来てもう3年近く経っていましたが、ドイツ語はどんどん上達するのにポーランド語は一向によくなりませんでした。日本でポーランド語を学ぶようになってもう5年も経っていましたが。このままではいつまでも役に立たないのではないかと悲観的な気持ちになっていました。しかし、この3ヶ月でウソのように上達したのです。3ヶ月ぶりでベルリンに戻ってきたとき、ドイツ語が出てこないのに驚きました。おそらく日常的なポーランド人との接触、学生寮での会話、秘密警察職員とのやりとり、指導教授との会話などが助けとなりました。必死となって自分を理解させる、相手を理解する努力をしました。これ以後もポーランド語はけっして流暢にはなりませんでした。が、会話、読書、作文にはほとんど困らなくなりました。研究生生活には十分の能力がつけました。

そういうわけで、ポーランド語はかなり自分の仕事の上では自由になりました。交流でもほとんど支障はなくなりましたが、流暢ではなかったです。現地に正式に留学した人と比べるとポーランド語はかなり落ちると思います。それはロシア語についても同じです。私はロシア語もよく読み、よく使いますが、ロシア語についてもロシアに長く留学した仲間と比べてかなり落ちます。私が一番得意だったのはもちろんドイツ語です。なにしろ5年半もいて、そのうち1年半はドイツ語で講義しましたから。英語も自信がないし、ポーランド語も自信がない、ロシア語も自信がない、そういう状態で今日まで来ています。まあ、仕方がないと思います。何語も流暢に話せることができれば、それはもう天才なので、それは普通の人間には叶わないことだと思います。

——ドイツではベルリンにいらっしゃったということですが、ベルリン滞在中にポーランドの人やポーランド関係者と接する機会は、当時はやはり少なかったのでしょうか？

それは少なかったです。求めればいたのでしょうけれども、私はベルリンにいるポーランド人とは意識的に付き合いを求めませんでした。ただ、さきほど述べたような事情で、ライナというインド人と接触が生じました。彼はゴムウカの伝記を書こうと思い立って、いろいろとインタビューをしている間にポーランドの秘密警察に睨まれ、実際に捕らえられて、ベルリンに逃がれ、ベルリン自由大学に入ってきました。彼の存在は私も久しく知っていたのですが、意識的に付き合いませんでした。将来ポーランドに行くときに、妨げになってはいけないと思ったからです。そうしたら、そこに梅田先生の元妻で、工藤幸雄（ポーランド文学者、ジャーナリスト、作家）氏と再婚した女性がやってきました。この方は私が何度もポーランドに出かけたときにお世話いただいたのですが、そのインド人ともワルシャワ時代に顔なじみだったので、ぜひベルリンで会わせてほしいと頼まれたのです。それで案内して彼が住んでいたベルリン自由大学の学生寮に連れて行きました。2人はワルシャワ時代に往き来があったようです。往き来があったといっても男女間のこととか政治的な関係とかではなく、ふつうに人間として交際があったということですが。

それは悪くなかったのですが、今度は私がポーランドに行ったときに、秘密警察に「この男を知っているか？」と尋ねられて、「知らない」とも言えなかったので、「もちろん知っているが、深くは付き合っていない」と言い逃れをしました。そのときにベルリンに帰ったらなんとかその男の動静を探ってくれと頼まれました。もちろんなにもしませんでした。そういうわけで秘密警察から逃げ回らなければならなくなりました。

ベルリンでそのインド人との間で、ポーランド語で話したことはありませんでした。ほとんどドイツ語か英語でした。彼はポーランド語でたくさんの本を書いて、亡命出版をしていました。ポーランドが自由化した後、彼はポーランドで英雄視されています。

それ以外に、ベルリンにいるポーランド人とは、探せばいたのでしょうが、私はあまり探さなかった。ので、付き合いはありませんでした。

ベルリン自由大学に私のポーランド学指導者は2人いました。1人は歴史家でオサチューク＝コラプ〔本部8頁〕でした。彼は私の指導教員の1人でした。名前が示す通りウクライナ人なのですが、もちろんポーランド語も流暢なウクライナ人で、おまけにドイツ語で講義をする人です。ものすごい訛りのあるドイツ語でした。同級生の1人にポーランド系の女性がいて一緒に授業に出ていましたが、ひどいポーランド語訛りで自分の両親のことを思い出して懐かしいと言っていました。もう1人は、ポーランド語の教師ですが、名前は失念してしまいました。

学生の中にもポーランド系がいました。とくにルール地方にはポーランド人のコミュニティがあって、

そこからやってくる人が多かったです。彼らとはポーランド語を話す機会がありました。先のオサチューク＝コラブの講義の聴講生もその1人ですが、彼女の両親は第二次世界大戦中に強制労働者としてルール炭田地帯に連れてこられて、戦後もそのままドイツに留まったのだそうです。

しかし、それ以外には少なかったように思います。一度ベルリン自由大学でヴィルブシャ (Witold Wirpsza, 1918-85) という人の講演を聴いたことがあります。彼はシュラフタ家系に生まれ、教育を受けました。ピアニストで、かつ詩人でもあります。戦争中抵抗運動に加わり、戦後共産党政権とも協力しましたが、1956年以後は異論派の運動に加わり、ジャーナリストとして活躍しました。1968年の三月事件に抗議して出国し、オーストリア、スイスを経て、西ベルリンに定着しました。トーマス・マンの翻訳なども手がけ、のちにドイツ国籍を取得しています。今から考えると私がベルリンに来たのとあまり変わらない時期に、やってきたのですね。大きな教養の持ち主でしたが、歴史家というよりも芸術家、政治ジャーナリストという感じでしたので、私はむしろ敬遠しました。

考えてみると、ドイツのポーランド研究者で生粋のポーランド人というのは少ないです。同様にロシア研究者でロシア出身というのも少ないです。これはアメリカとは非常に異なる現象ではないでしょうか。アメリカでは私の印象ではポーランド研究者やロシア研究者は半分ぐらいそれぞれポーランド系、ロシア系ではないかと思います。しかし、ドイツではそれはむしろ例外でした。ポーランド人とは正直なところ、ベルリンであまり知りあう機会がありませんでした。ですから私はポーランド語ができるようになると、ポーランド自体に行って、ポーランドの研究者の指導を受けるようになりました。

今では、ポーランド人もロシア人も、ベルリンだけじゃなく、ドイツのあらゆる都市に溢れかえっていて、道路でも大きな声でロシア語とかポーランド語で話しています。新しく入ってきた彼らはあまりドイツに対してコンプレックスがないのです。自分たちは何も悪いことをしていない、権利があつてここにきているのだと、そういう風な調子で生活していますから、自分の言葉で堂々と話しても何も悪くないと思っています。彼らが本当の意味でドイツ化するのは、おそらく次世代になってからではないでしょうか。私がいたころは冷戦時代でしたので、ロシア人やポーランド人は道路とか、ショッピング中に自分の言葉で、大声で話すということはまずなかったです。ひそひそと隠れて話すのを何度も聞いたことはありますが、大っぴらに堂々と自分の言葉で話すというのは体験したことがありませんでした。

ロシア・東欧諸国で大変動があったあとドイツを訪れたときに変化の大きさに驚きました。ドイツ人は普段は自分の車で動きますからバスなんかには乗らないのですが、ロシア人やポーランド人が停留所やバス内でふんぞり返って長々と話しているのをよく目にしました。大声で、ロシア語あるいはポーランド語で話していて、全然ためらいがありませんでした。良いことだと思いました。ドイツに5年、10年いるとそこそこお金も溜まってくるでしょうから、今ではそれほど悪い生活をしていないと思います。

それからドイツに行って安ホテルに泊まると、ホテルの従業員が大体ロシア人なのです。ロシア人というか、ロシアから帰国したドイツ人です。こちらがロシア語で話しかけると、本当に喜んでロシア語で受け答えしてくれます。そういう記憶もあります。ドイツ語は本当にたどたどしい感じでした。

【東ドイツ】東ベルリンには西ベルリンから S-Bahn（近郊線）で行き、1 日 10 マルク（＝約 1,000 円）の義務的な通貨交換をすると、いつでも入国することができました。すぐ隣でしたから、毎日のように行きました。これは私が想像するに、西ベルリンに來た外国人から交換可能通貨を稼ごうという東ドイツ当局の意図から出た仕組みです。ただし、東ベルリンに限定され、それ以外の東ドイツを訪問しようとするビザを申請しなければなりません。その手続きをして、ベルリン郊外の観光地、ドレスデン、ライプツィヒを訪問し、ドイツ人の知人の車でアンハルト＝ツェルプストなどを訪れたりしました。しかし、その頻度は決して多くありませんでした。最大の訪問先はやはり東ベルリンでした。ここでワルシャワ・コンタクトが役立ちました。ワルシャワでの語学研修には大勢の東ドイツからの参加者がいましたが、少し話すと彼らが親政府派、反政府派、無関心派に分裂していることが分かりました。私が親しくしたのは東ベルリン出身のロシア文学専攻の青年でした。父君が第二次世界大戦中に反ナチ抵抗運動に参加し、共産党政権に近くて、フンボルト大学の副学長にまで出世したが、政権と対立して、しばらく前に引退してしまったと語りました。彼の家を何度も訪れましたが、東ベルリンの東部にあって、すぐ近くに悪名高いシュタージ（秘密警察）の本部がありました。そこで体制批判の声を聞くことができたのは驚きでした。強い印象を受けたのは、彼が決して反露ではなく、また親西ドイツでもなく、むしろソ連内の反体制運動に大きな共感を寄せていたことでした。社会主義国の反体制運動の国際的連帯があるかのような印象を受けました。

ポーランドと比べて、東ドイツは警察国家の面影が強く残っていました。同じドイツ人国家である西ドイツと比べてもそれは明白でした。ポーランドや西ドイツでは警察と言い争うことができるし、むしろそれがふつうでした。同じ寮に住んでいた韓国人の友人から聞いた話ですが、西ベルリンの警察官に「ドイツの警察はナチスの流れを引いていて、外国人を差別する」と批判したら、その警官はニコッと笑って「昔はそうだったけど、今は違うよ」と言ったそうです。しかし、東ドイツでは有無を言わさない取り締まりがありました。考えてみると、東ドイツ地域では 1933 年のヒトラーの権力掌握以来、民主化したことが一度もなかったのです。警察の横暴さについては書籍や、西ベルリン、西ドイツに亡命してきた旧東ドイツ市民からいろいろ聞き知っていましたが、実際に体験してみないとその怖さは理解できません。チェックポイントで東ベルリンへの入国手続きをするたびにそれを感じましたが、1979 年に多くの書籍を抱えてロシアからワルシャワを経てはるばる西ベルリンに旅行したときのことを思い出します。私は西ベルリンで降りたらすぐ日本に発送できるようにと多くの書籍小包を抱えていました（東側から郵送すると没収されるかもしれないので当時の西ベルリンの中央

駅（動物園駅）近くの郵便局から送ることにしていました）。西ベルリンに到着するまであと 40 分ぐらいのときに東ドイツ税関が乗り込んできました。係官はナイフで梱包の紐を切って検査しました。ロシアやポーランドから何十時間を旅してきても一度もそんなことがなかったのに目標を目前にしてこの検査です。また急いで梱包し直して発送に備えなければなりませんでした。国境に近づくと国際列車が急停車し、パラパラと警察官が飛び乗ってきて車内点検を始めることもありました。また、1984 年秋のある日深夜に西ドイツから車で東ドイツ領内のアウトバーンを走って帰ったときのことです。疲れたのでパーキングエリアに車を停めて車内で仮眠をとっていたら突然警官に叩き起こされました。「不法停車」だということで法外な罰金を取られました。どうも暗くてよく分からず所定の場所に停めていなかったせいだったようです。西ベルリンに戻って新聞を開くと、ちょうど東ドイツが外貨不足に陥って警察にあらゆる手段で外貨「収益」を上げるようにと指令を出していたことを知りました。

【チェコスロヴァキア】東欧諸国の中でもっとも頻繁に訪問したのは実はプラハでした。東大大学院で研究生として知りあった佐々木和子さんが、私と同時期に日本を出発してプラハに来ていました。ということは、彼女はワルシャワ条約機構軍のプラハ進駐を、身をもって体験したことになります。彼女はその前にプラハに 7 年ほど留学したことがあり、1966 年に一度日本に帰国した後、またプラハに戻ってきたのでした。ベルリンから夜行列車で行くと翌朝にはプラハに着きました。このためベルリン留学中に 10 度ほどプラハを訪れたように思います。プラハは事実上ワルシャワ条約機構軍の軍事占領下にあり、徐々に「正常化」されてゆきましたが、私がベルリン留学中の雰囲気は暗かったです。しかし、独裁体制下の国の常として物価が安かったのも、学生身分の者にとっては凌ぎやすかったです。プラハは破壊されたことがありませんので、中央ヨーロッパの諸都市に比べて観光資源が比較にならないほど豊かでした。食事もビールも美味しかったです。

単に観光だけではなく、佐々木さんの通訳によって幾人かの知識人にもインタビューすることができました。自分がポーランドを研究対象にしようとしているというと、非常に羨ましがられました。彼らはポーランドの知識人に対して深いコンプレックスを抱いているようでした。チェコとポーランドは隣接していて、言語的にも近いので交流も多いですが、けっして互いに尊敬しあっている関係ではありません。ポーランド人は封建貴族（シュラフタ）の伝統、チェコ人は農民と都市の小市民の伝統を誇りにしていて、互いに心から軽蔑しあっていました。生活水準はチェコの方がはるかに高かったです。戦後、両国とも社会主義化されましたが、この相互侮蔑の姿勢は変わりませんでした。しかし、1968 年を境として両国民の関係が変わったように思います。1968～88 年の 20 年間の両国の歴史は対照的でした。チェコ人は軍隊がやってくるとすぐに抵抗をやめました。ポーランド人はそういうことがあっても抵抗を続けました。チェコのインテリはポーランドのインテリを尊敬する、

われわれにはあのようなことはとてもできない、ということをよく言っていました。ポーランドでは外貨が導入され、西側への出国が許されました。知識人と労働者の粘り強い抵抗があり、1981年12月の戒厳令導入以後もそれは変わりませんでした。これに対してチェコでは「プラハの春」の弾圧以後、改革運動が沙汰止みとなり、西側との連絡が途絶えがちとなりました。人々は体制順応的となり、知識人の孤立が深まりました。彼らはポーランドの同僚たちの活躍を羨望の思いで眺めたのです。それは1968年から1989年まで変わりませんでした。

【ソ連】4年間のドイツ滞在中にソ連に旅行したのは一度だけでした（1969年9月）。ベルリンの東欧研究所 Osteuropa-Institut のロシア人やドイツ人教師とともに10日間、ロシア（ソ連）への団体旅行に参加しました。一つだけ強い印象に残っているのは、モスクワの街をブラブラと散歩して、古ぼけて壊れかかった小さな教会を見つけて、写真を撮った時のことでした。それを終えてしばらく街を歩いていると、両側に2人の制服姿の民警が立っていて、両脇を抱えられるようにして最寄りの詰め所に連行されました。詰め所では上司と覚しき人物から何をしたかと問われたので、散歩していただけだと答えました。さらに、他になにかしたのではないかと問い詰められて、珍しい古い教会を見つけたので写真を撮ったと言ったら、余計なことはするなどだけ言われて、釈放されました。それ自体は大した出来事ではありませんでしたが、誰かが、おそらく市民が私の散歩を観察していて、いちいち警察に報告していたらしいことを知ってショックを受けました。以後ロシアではいつも警戒するようになりました。

このとき泊まったホテルはなんの変哲もないホテルだと思いましたが、実は「ホテル・ルックス」という有名なホテルであることが判りました。われわれが泊まったときは改名されて「中央ホテル」となっていますが、第一次世界大戦前の1912年に開設されています。革命後は多くのコミンテルンの要人が定宿にするホテルとなりました。コミンテルンの日本代表だった片山潜もここに泊まっていた。このホテルに泊まっていた多くのコミンテルンの活動家が1930年代の粛清の犠牲者となりました。戦後ポーランド共産党の指導者となったビエルトは、このホテルに老いたる母と一人娘アレクサンドラを残して、国内の抵抗運動に参加するために戻ってゆきます。このときビエルトの妻も夫とともに国内に戻りますが、ナチス・ドイツに捕まって殺されています。娘は戦後帰国しますが、父の名前を名乗るのを避けたことは先に記した通りです。私はこの歴史的なホテルが懐かしくてその後二度訪ねているのですが、名前は旧名に戻っているものの、どういうものかホテル自体はずっと改修中です。

ロシアでの見聞はこの程度でしたが、のちにワルシャワでの語学研修で知りあったロシア人との関係がおそらく当時のふつうの日本人が持てなかつただろうことを体験させることとなります。それは当時21歳ぐらいの女性でした。私はとくに女性としての彼女に関心をもったわけではありません。

本人の言葉では、彼女自身は研修に参加したオランダ人の青年アルフレードに関心を寄せたということです。私は会話の相手として関心をもちました。非常にオープンな姿勢で、なんにでも関心を示しました。石川啄木の詩がロシア語になっていて、ロシア語としても素晴らしいが、おまえは知っているかといって、諳んじてくれました。聞いてみると「一握の砂」でした。住所を交換し、モスクワに行く機会があれば連絡しようと思いました。スラ研に就職してから、1978～79年にモスクワを訪れたときに連絡をとってみると、すでに結婚していて自宅に招待してくれました。ロシア人の父親（このときすでに故人）は5ヶ国語の通訳（主にスペイン語の通訳）、ユダヤ系の母親はタス通信の職員という知的な家庭でした。父親は日本語にも通じていたらしく、書棚には日本語のマルクス＝エンゲルス全集が並んでいました。本人の専門はポーランド語だろうと思っていましたが、なんとルーマニア語でした（結婚相手もルーマニア人でした）。弟がいて、モスクワ大学の学生でしたが、日本語の方言に関心をもっていて、このとき博士論文を書いていました。のちに言語学者として認められて、モスクワ人文大学教授となります。家族はもちろん体制に批判的でしたが、とくに政治に関心をもっているふうではなく、知的な関心を優先させていました。こういう家族と知りあったということが、ワルシャワでの語学研修の産物の一つでした。

——ティフ〔本部 14 頁〕はユダヤ人で、トレ布林カから辛うじて生き延びて、ご家族からも犠牲者が出たという方だったと思いますが、その点についてお聞きになったことはあったのでしょうか？

それについては、ティフからは一言もなかったです。ただこちらでいろいろ調べてみると、彼はトレ布林カに行ったことはないです。トレ布林カに行ったらもう生きて帰れなかったと思います。あそこはナチスの恐ろしい収容所の中でも最も恐ろしい収容所の一つでした。ポーランド語のウィキペディアによると、一族はもともとウッチ県のラドムスコ (Radomsko) という小都市に住んでいて、1942年にナチスの命令でそのゲットーが解体されたので、ワルシャワに逃げ、ポーランド人に庇護されたということです、一族のほとんどはトレ布林カで殺されています。

ティフという苗字は風変わりです。ポーランド人にはないです。私は、不思議に思ってどこから来たかと尋ねたら、多分オランダ語からじゃないかと言いました。ドイツ語で「池」のことを Teich と言います。これがオランダ語でティフと言うらしいです。それがそのまま定着したのではないかと言っていました。私はその話を聞いて、自分はオランダ系だということを示唆したのかなと思ったのですが、とんでもありませんでした、彼は正真正銘のユダヤ人でした。しかし、彼は私には自分がユダヤ人であるとは一言も言いませんでした。奥さんもユダヤ人であるとは言いませんでした。ウィキペディアによると、「ティフ」という名前は戦争中ワルシャワに避難したときに自分で採用した名前で、

子ども用の漫画の登場人物のようです。

ワルシャワからさらにルブリンに避難したときに共産党系の抵抗運動「青年闘争同盟」に参加して、のちに夫人となるルツィナさんと知り合いました。1956年から科学アカデミーの歴史研究所と党史研究所の両方で働いていたが、1968年の三月事件のときに前者から追放されたそうで、私が知ったときは後者の籍だけが残っていました。体制転換の後、1995年から10年間、有名な昔の大シナゴークがあったところの、すぐ背後にできた小さなユダヤ歴史研究所の所長を務めました。私のもう1人の知り合い、たいへん世話になった知り合いにトマシェフスキ (Jerzy Tomaszewski) というワルシャワ大学の教授がいます。この人はロシア・東欧諸国のユダヤ人だけではなく、少数民族問題一般を研究している人で、彼がその後を継いで所長になりました。

2人とも私は非常に親しくさせてもらいましたが、トマシェフスキもユダヤ人であるということは長い間知りませんでした。だから私が付き合っている範囲には、意外にユダヤ人が多かったということです。こうしたユダヤ人を紹介してくれたのは私の主任教授だったガルリツキですが、彼自身はユダヤ人ではありませんでした。先ほど言ったようにルヴフ（リヴィウ）で活躍していた弁護士の子どもですが、ユダヤ人ではなく、典型的なポーランド人でした。彼はピウスツキ研究で有名となりました。ユダヤ人に対して非常に理解のある人物で、ティフやトマシェフスキを紹介してくれました。ガルリツキとティフはワルシャワ大学歴史学部で同級生でした。それから、最近ちょっと記憶力が悪くなってよく名前が思い出せなくて困りますが、有名なロシア思想史の研究者で日本でも紹介されているヴァリツキ (Andrzej Walicki, 1930-2020) もユダヤ人ではありません。彼は封建貴族の末裔です。彼の先祖はワルシャワの近くに城をもっていたと、科学アカデミー総裁だったギエイシュトル (Aleksander Gieysztor, 1919-99) から聞きました。

もう1人、ガルリツキが紹介してくれたユダヤ人は知識人向けの週刊誌『ポリティカ』誌の編集者でした。ちょっと名前が思い出せないのですが……ウルバンか、いやウルバンじゃなくて、ウルバンの右腕だった男、そうトゥルスキ (Marian Turski, 1926-) でした。私にふっと腕を見せてくれました。番号が入れ墨されていました。それは何ですかと訊いたら、アウシュヴィッツの囚人番号だと答えてくれました。彼はアウシュヴィッツから解放されて、ワルシャワに戻って来て、大学も出て、『ポリティカ』の編集員になったのです。名編集者でした。彼の書いた文章も読みましたが、素晴らしい文章でした。別に意図的にユダヤ人だけを選び出してお話しをしているというわけではないので、つくづく私の周辺にはたくさんのユダヤ人がいたという記憶があります。

——今のポーランドでも、ユダヤの出自を隠して生活する人が多いと聞きました。当時の社会の中ではアウシュヴィッツや戦前、戦争期の反セム主義などは自分の中にとどめておくという状況だったのでしょうか？

それもあるだろうと思います。ポーランドが発行している人口統計を見ると、3年ぐらい前でしたが、現在ポーランドにいるユダヤ人は合計 5,800 人という数字が出ていました。そんな少ない話はないだろうと私は思いました。それはつまり、自分はユダヤ人であると名乗る人が少ないだけで、実際ユダヤ人はおそらくその 10 倍も 100 倍もいるんじゃないかと思うのです。50 万人いるとは思いますが、30 万人ぐらいは絶対いると思いますね。

ユダヤ人が自分の出自についておおっぴらに話さなかったのは、戦後の社会主義国の一つの伝統であったように思います。政府の政策であったというのではなくて、一つの自己規制であったように思います。ミフニク (Adam Michnik, 1946-) という共産党時代に反体制的な知識人のリーダーの 1 人だった人がいますが、彼が体制転換後にこういうことを語っています。われわれの間には何のタブーもなかった。スターリン主義時代の言論弾圧とか粛清とか秘密警察とかありとあらゆる悪についておおっぴらに議論した。しかし、思い出すと、ホロコーストについて話しあったことがまったくなかった。ユダヤ人が受けた恐ろしい弾圧について話し合ったことがなかった。なぜだろうか。自分にも分からない、と語っています²⁵。ミフニクもユダヤ人です。

イレナ・パウエル (Irena Powell) というイギリスの日本研究者と結婚したユダヤ人女性がいます。彼女はポーランド出身で、母とともにホロコーストを生き延びた人で、自伝を書いています²⁶。彼女も戦後ポーランドのユダヤ人の間でホロコーストについて議論するのを聞いたことがないとしています。これは本当だろうと思います。体制転換の後にはじめて語り始めるようになったのです。

本人たちもなぜかは分からないと言っているのですが、われわれが推測するのは困難で、間違ったことしか言えないように思いますが、あえて推測すれば、一つの恥の感情ではないでしょうか。つまり、ほとんど反抗することなく、唯々諾々と殺されてしまった自分たちのことを誇らしげに語ることはできないという感情です。ユダヤ人は戦後、社会主義体制下で一生懸命ポーランド人になりきろう、ポーランド人として誇りをもとうと努力しました。イレナの父親は戦争中便宜的に名乗り始めたポーランド名を戦後自分の本名として、大事に使い続けました。ミフニクのように体制に反抗したユダヤ人もいましたが、大部分のユダヤ人はむしろ共産党政権に忠実で、その中で出世しました。その結果、自分のアイデンティティを失ってしまうユダヤ人も出てきました。

他方では、自分がユダヤ人であることを誇りに思っている人も少なからずいることを知りました。私の知り合いで、スタニスキス (Jadwiga Staniszkis, 1942-) という社会学者がいます。いま科学アカデミーの研究所で研究員をやっていますが、この人は体制転換以前から有名な反体制派のイデオログでした。彼女は名前が変わっていますが、ユダヤ人じゃないのです。彼女の言うところによると、本当かどうかわかりませんが、キュリー夫人の姉か妹かの末裔だそうです。先祖はリトアニア系だそ

²⁵ Adam Michnik, „Żydowski problem z pamięcią,” *Gazeta Wyborcza*, 2013.4.29, <https://wyborcza.pl/magazyn/7,124059,13816487,zydowski-problem-z-pamiecia.html> (2025.1.9 最終閲覧確認)

²⁶ 河合秀和・早坂真理訳『ホロコーストを生き抜く——母の伝記と娘の回想』彩流社、2017 年。

うです。彼女にはコジェツ (Michał Korzec) という配偶者がいて、ユダヤ人でした。本当に信じられないようなことですが、戦争中ルブリンの近くの森に隠れて生き抜いたというのです。ヤドヴィガ〔・スタニスクス〕も実際に車でその場所を見に行ったそうです。こんなところで冬に家族が生活できるとはとても思えないところに住んでいたというのです。戦後そこから出てきて、ワルシャワに戻って、普通の市民になって人生を歩んだといえます。ワルシャワ大学に入って、1956年に反体制派となり、ミフニクなどと一緒に旗を振ったそうです。しかし、1968年の三月事件でユダヤ人だということで国から追い出されます。逃げて行った先がオランダのライデン大学でした。数学科を卒業して、物理学の教授になりました。そんなことがあるのかと不思議に思うのですが、数学と物理学の間ぐらいのところの領域で活躍したということなのでしょうか。

あるときスタニスクスがライデン大学に講演にやってきて、〔コジェツが〕それを聞いて感激して、一目惚れしてしまったというのですね、本当かどうか知りませんが。初めは彼女が長距離バスでオランダに通ったけれども、そのうちに彼の方が毎週のように、オランダからワルシャワに通ったそうです。そうして2人は結婚しました。コジェツは50歳になったら年金がつくことを知って、さっさと大学を辞めたそうです。

彼は、われわれがスタニスクスをスラ研に招いたときに同伴者として来日しました。彼とは一緒に何度も話したことがあります。いま何やっているんだって聞いたら、中国の研究をしていると言うのです。のちにワルシャワの旧市街 (Stare Miasto) にある彼の、というか彼女の事務所に行きました。彼はオランダの週刊誌か新聞社かの中国特派員ということになっていました。しかし、ほとんど中国に行っていませんでした。行けなかったのです。しかしインターネットで中国のニュースを取り寄せて——中国語の新聞を読めるのです——それでオランダ紙に記事を書いているということでした。スラ研でも一度報告してもらいました。たまたま同伴者としてやってきた男で、別に研究者と考えたわけではないのですが、たしか朝鮮戦争におけるロシアの役割とかいう報告でした。見事なものでした。

その男が、俺には最後の望みがあるというのです。それはユダヤ教のラビになることだと。その後も何度もワルシャワを訪問して会いましたが、ラビの試験を受けるために一生懸命勉強していました。それはやめた方がいいんじゃないかとも言ったのですが、これは俺の最後の野心だ、これをやったらもう死んでもいいと思っているというのです。はたしてラビになることができたかどうか知りません。私が言いたいのは、ユダヤ人であることに固執しているユダヤ人も少ないながらもいるということです。コジェツはみんなに言うんです、自分はユダヤ人だ、と。まったく恥じていない感じでした。むしろ誇りに思っている感じでした。そういうユダヤ人もいます。

私にはたくさんユダヤ人の知り合いがいました。私がポーランドに行って最初にできた友人がユダヤ人で、ドラタ (Leszek Dolata) という典型的なポーランド名でした。父君は日本でいえば通産省

の役人でした。おそらく共産党政権下で出世したユダヤ人の1人でしょう。息子は私がワルシャワでポーランド書を買うのにいつもつきあってくれました。天才的に語学ができる男で、私とはいつもドイツ語で話しました。彼はのちに精神を病みました。推測するに、ポーランドの多くのユダヤ人が抱え込んでいる精神的緊張に耐えられなくなったのでしょうか。それで連絡が途切れて、その後どうなったかは判りません。

——ワルシャワでの語学研修で出会われた東ドイツから来た人たちの出自に関わる情報については、何かご存知でしょうか？

それはけっこう複雑です。正確にはよくわかりません。ワルシャワで、彼らが話している中に割り込んで、いろいろと話し合っただけの印象ですが、ポーランド語ができるとか、ロシア語ができるとかいうことは、やっぱり彼らにとっては一つのプラスなのでしょう。その能力を示すことができればなにか職業上の利益を得ることができるようでした。ワルシャワに語学研修に来るということは一つの出世の手段だという印象を持ちました。ただ、さまざまでした。本当に言葉に関心があるだけの人もいたし、出世のためだけに来ている人もいたし、それから、さきほど話した青年みたいに、ロシア文学に関心があって、またロシアの反体制派運動にも関心があって、そのためにわざわざロシア語をやっているという人もいました。

ただ半分ぐらいは明らかに共産党のスパイじゃないかと思われる人がいました。出世街道を上りたい、そのために何でもするという感じの人もいました。彼らの間では誰がそういう類の人間かがわかっているという感じでした。そんな場合にはなるべく接触を避けるような、敬遠するような態度をとるのもいました。

それから、私の知り合った別の東ドイツ人ですが、だいぶん北の方のグライフスヴァルト (Greifswald) から来た女子学生がいました。ロストックの近くのバルト海に面した小さな古い大学都市です。ロシア語かポーランド語をやっている学生でした。彼女は田舎の大学生でした。政治的な関心はまったくないという感じでした。ごく普通の、日本にもいるような、ロシア語が好きになって勉強したとか、ポーランド文学が好きになって勉強したとか、そういう感じの平凡な女子学生でした。

ですから、東ドイツ人のグループ全体でなにか一つの性格を持っているとは言えなくて、1人1人やっぱり違っていたと思います。私がたまたま知り合った、父君がフンボルト大学の副学長にまでなったという学生デバイ (Michael Dewey) は例外的な男でした。東ドイツの高級インテリの子息ではなかったのでしょうか。ああいう人物はなかなかいるものではないと思いました。父君は戦時中の反ナチ抵抗運動の出身で、生き残って、戦後共産党に協力して——ひょっとするとみずから共産党員だったのかもしれませんが——出世して、フンボルト大学の副学長にまでなったという人物の息

子ですから。私が知りあった頃は、父君はすでに東ドイツの異論派に属しているようでした。東ドイツの代表団は15～16人いたと思いますが、その中で知的なリーダー格だったと思います。普通の学生ではなかったです。

——センシティブな話かもしれませんが、ドイツの旧東部領の関係者はいたのでしょうか？

私の知る限りではなかったですね。西ドイツの代表団の中にもなかったと思います。ドイツ人の旧東部領に対する感情を理解するために、私のもったごく個人的な経験をお話ししましょう。私が西ベルリンで付き合っていた人の中に、旧ドイツ東部領出身だという人がいました。私がのちにベルリン自由大学講師として招かれたときの大学の同僚でした。いろいろと私の面倒をよく見てくれた当時50歳ぐらいの女性でした。名前を忘れましたが、当時のベルリン自由大学の講義一覧を見れば、その名前を見つけることができると思います。シュレジェン（ポーランド語でシロンスク）出身で、貴族だったのでしょうか、そこに大きな所領があったと言っていました。それを全部失ってしまったわけです。だから西ドイツ社会は不平等だというのは。私ははじめ彼女が意味することがよく理解できなかったのですが、こういうことでした。

西ドイツには、彼女のように、シュレジェンからやってきて無一文になってしまった人間もいるけれど、他方ではいまだに昔ながらの所領を持っているのもいて、贅沢な暮らしをしている。（西ベルリンではなく）西ドイツにはたくさんいる。これは不公平ではないか。同じドイツ人として不公平だ、なぜ私と彼らとの間に違いがあるのかわからない、西ドイツ政府は自分に失った領地を補償するべきだ、こう言って私に訴えるのです。私は戦争で財産を失った者がいるのは当たり前ではないか、なにを今ごろ文句を言うのか、彼女のいうことが全然理解できない、と思いましたが、彼女としては自分の権利が踏みにじられている、西ドイツ政府は私にも補償するべきだと言うのです。なるほど、ヨーロッパ人の伝統的な権利感覚というのはこういうものかと思いました。そうだとすると、日本人の権利感覚は弱いものだなと思いました。

こうした不幸なドイツ人にとってももちろんポーランドから領土を取り返すことができれば一番よいのですが、それはもう不可能です。しかし、そうとすれば、ドイツ政府はわれわれに然るべき補償をするべきだ、と彼女はしきりに訴えました。西ドイツでそういう人々にはときどき会いました。ただ、大多数のドイツ人、東ドイツ領、ポーランド領から追い出された大多数のドイツ人はこういうのです、われわれは悪いことをやった、仕方がない、これが運命だ、現在の境遇を変えるつもりはない、と。大方の人々がそう言います。おそらく失った財産がシュレジェンの彼女ほど多くなかったのでしょうか…。

いろいろ話し合いましたが、何が何でも旧ドイツ領を取り返すべきだという人に私は会ったこと

がありません。おそらくいるとは思いますが。いわゆる被追放者同盟 (Bund der Vertriebenen) という、追放されたドイツ人の公式団体があります。そういう団体のメンバーや指導者には取り返せるものなら取り返してほしいと願っている人が少なからずいると思います。あの団体もキリスト教民主同盟 (CDU) 系と社会民主党 (SPD) 系とが分かれています。だから被追放者 (Vertriebene) だからといって、必ずしも同じ見解を持っているとは限らないようです。政党の方でも票が欲しいですから、そういう追放された人々も組織する必要があるので、一生懸命取り込もうとしています。しかし、それぞれの政党に立場があって、たとえば社会民主党 (SPD) は、私が留学していた時は、東方領土は放棄すべきだという立場でしたから、それに属する団体の人々はその政策を支持しているわけで、必ずしも意見が一致していないと思います。

——ベルリンでポーランドの研究をされている時に、そうした旧東部領に関わる個人的な背景を持っている方と話をされることはあったのでしょうか？

私個人に関しては、それはなかったです。その旧ドイツ領のシュレジエンを逐われて西ドイツにやってきたという人は、別にポーランド人と親しかったわけでもなく、ポーランド語ができたわけでもなく、現在ポーランド領になっているところにいた当時から純粋にドイツ人で、それを変えようと思ったことはなかったのです。ポーランド人になりたいと思ったこともなかったような人々ですから、あんまりポーランドへの思い入れはない感じでした。

ただ、ドイツのソ連・東欧研究者と付き合っていると、東欧出身の人は結構多いです。とくに多かったのはバルト諸国出身者です。私の知り合いの1人で、ケルン大学の教授だったマイスナー (Boris Meissner, 1915-2003) は奥さんもエストニア出身で、夫婦ともエストニア語ができて、もちろんロシア語もできます。子供に隠さなきゃいけないような会話をするときはエストニア語でやるのだと言っていました (笑)。日常会話はもちろんドイツ語でしたが、ロシア語も非常に堪能でした。

ちょっと話は違いますが、マイスナーは、1955年でしたか、西ドイツとソ連が国交を回復したときに、ドイツ側の代表団の一員としてモスクワに飛んだことがありました。彼はもちろんロシア語が自由にできる人ですが、モスクワでフルシチョフとかいろんなソ連側の代表団と飲み会をやったときにラテン語で話したというのです (笑)。それがまたドイツのインテリらしいです。ドイツには Großes Latinum (大ラテン語) という資格があって、それがないと博士号が取れません。だから、学者は基本的にラテン語ができるという前提になっています。晩餐会するときなどにラテン語で演説するなんていうのはドイツではよくあることですが、この機会に彼がすこしラテン語で話したら、なんとロシア側の代表団の中にそれが分かる者がいたというのです。これもまた信じ難い話ですが、それがなんとマレンコフ首相だったというのです。そういう風な逸話を聞きましたね。もちろんフルシチョフなん

かは何もわからないですよ（聴き手一同笑い）。でもマレンコフはちゃんと頷いてくれた、自分のラテン語がわかってくれたようだし思い出話をしてくれました。

マイスナーはその後ずっとドイツ外務省の顧問をやっていました。本もたくさん書いていました。エストニア出身であってもエストニアの領地を返してくれというわけにもいかないです。バルト・ドイツ人なので自分の所領が返って来てくれたら嬉しいでしょうが、別にとくに深い思い入れはなかったように思います。ドイツのソ連・東欧研究者、ロシア・東欧研究者の中には東欧出身者が多いのは事実です。しかし、なにかそのルサンチマンがあるようには私は思わなかったです。

いろんな人がいましたね。私の大学の友人でしたが、フェルディナンドというオーストリアふうの名前で、恥ずかしいと言っていました。旧オーストリア＝ハンガリー出身、たしかスロヴァキアでした。ハンガリー出身で、お父さんはハンガリー語しかできなくなっているというドイツ人です。そういう例はけっこう多かったらしいですよ。ただ民族性（民族帰属）がドイツ人だったので、結局、戦後西ドイツに逃げなければいけなかったと言っていました^{iv}。その男自身はドイツ語しかできなかったのですが、お父さんはハンガリー語の方が楽だという、そういう家庭だったのですね。でも何か…ハンガリーに帰りたいというような思いはもうまったくないようでした。

——ドイツ留学中に東欧研究所におられて、そこに所属していた方々とモスクワに10日間行かれたと先程伺いました。ドイツでは、かつての東側の領土について扱う「東方研究」について戦前との繋がりが指摘されますが、東欧研究所なのにロシアも対象としていたことと関連はあったのでしょうか？

ドイツ語には「東欧」(Osteuropa)の他に、Ostenという言い方があります。Ostenは「東方」という意味です。そのドイツの「東方」の研究をすることで「東方研究」Ostforschungという概念が生まれました。なぜOstenなのか、なぜ東欧Osteuropaなのかと疑問が湧くのは当然です。結局ドイツの東にある地域全部が「東方」Ostenだ、「東欧」Osteuropaだという考え方です。ですから「東方」Ostenの研究、Ostforschungは、中国はもちろん、ベトナムまで入ります（笑）。「東方」Ostenはドイツの東にある地域ですからそうなりますが、「東欧」Osteuropaの場合はEuropaという限定が入りますからせいぜいウラル山脈あたりまでです。

ドイツよりも東にある地域が「東方」Ostenだという考え方は19世紀からあったようです。19世紀に生まれたドイツの国歌にドイツの国境を示す言葉として von der Maas an die Memel というのがあります。これはフランスとの国境（マース川）からロシアとの国境（メーメル川）までという意味です。つまり、当時はロシアがドイツのすぐ東に接して広がっていました。そこで「東方」Ostenはほとんどロシアと同義語となります。ドイツ自身はどこにあるのかといえば、Mitteleuropa、つ

まり中央ヨーロッパ（中欧）にあることになります。日本語でいう「東欧」はどこに入るかといえば、おなじ「中欧」Mitteleuropaですが、「中欧」Mitteleuropaの中の東部分、つまり「東中欧」Ostmitteleuropaということになります。これはかなり自然な認識で、偏見は含まれていなかったと思います。東欧諸国自身でも「東中欧」Ostmitteleuropaという言い方が使われるようになっていきます。おそらく復活したのではないのでしょうか。驚いたのは、ポーランド語でも studia wschodnie、つまり「東方研究」Ostforschungという言葉が復活し、Instytut Studiów Wschodnich（つまり Institut für Ostforschung）ができています。実は、ドイツ自身では「東方研究」Ostforschungは偏見が入っているという考え方が広まって、冷戦後使われなくなりました。東方研究所 Institut für Ostforschungは1994年に東中欧研究所 Institut für Ostmitteleuropa-Forschungに改めています（正式には、Herder-Institut für historische Ostmitteleuropaforschung）。

しかし、ドイツ語に「東欧」Osteuropaという言葉自体はしっかりと根づいています。どこを指すかといえば、ドイツよりも東で、だいたいウラル山脈までです。つまり、ロシアを含みます。含むというか、むしろロシアが「東欧」Osteuropaの中心であると考えられています。これは英語の Eastern Europeとの違いです。長い間、われわれ日本人は、ソ連・東欧とか、中欧とか、「東欧」とか、「東中欧」とかいろんな言葉を使いましたが、ドイツではソ連、ソヴィエトという言葉があまり使われませんでした。やはりずっと、「東方」Ostenとか「東欧」Osteuropaという考え方が強かったように思います。この地域は、なにかイデオロギーによって呼ぶべきものではなくて、やはり地理的に呼んだ方が良いという考え方が強かったように思います。ですから「東方研究」Ostforschungという考え方が残って、その専門誌がつい最近まで出ていたというのは、それが正しい呼び方だという考えがあったからではないかという気がします。そこになにかドイツ人自身のイデオロギー的な傾向を見出すことができないこともないと思いますが、それよりはむしろドイツよりも東の地域を呼ぶのに他に適当な言葉がないという感じがあったからではないかと思うのです。

ドイツ人が一番苦しんだのは、バルカンの正しい呼び方がなかったことです。ドイツ人の考え方ではバルカンも「東方」Ostenであり、「東欧」Osteuropaであるけども、やっぱりどこか違うということでしょう。たしかに東だが、東だけではなくて南の方でもあるという感じがあって、いつの頃からか「南東欧」Südosteuropaという言葉を使うようになりました。バルカンは少なくとも学界ではあまり使わないように思います。ドイツ語の場合はバルカンにはちょっと軽蔑の意味があります。それで地域の正式名称としてはよろしくないと思われるようです。「南東欧」Südosteuropaは非常にニュートラルですから、この名称が好ましいということのようです。

「東欧」Osteuropaはドイツよりも東のヨーロッパという意味で今日に至るまでそれほど抵抗なく使われています。この言葉にはなにかドイツ人の覇権の野望がこめられているとか言われることがあります。それはないと思います。それがそういう意味で使われたのはむしろ「東中欧」

Ostmitteleuropa ではないでしょうか。「中欧」Mitteleuropa は第一次世界大戦中のドイツの東ヨーロッパ政策を表現した言葉でした。つまりドイツ人が当然支配すべき地域だという含意がありました。それはかなり帝国主義的な発想でした。しかし、今日ではほとんど古語になっています。これに対して「東欧」Osteuropa そのものにはあまりそれを感じませんでした。「東欧研究所」Osteuropa-Institut は今でもドイツの至る所にあります。とくに大学付置の研究所としてあります。しかし、その研究内容は日本でいう東欧研究ではなくて、主としてロシア研究です。もちろん東欧も含まれますが。ドイツ人にとっては、東ヨーロッパにはゴチャゴチャとしたものがあって、それがロシアまで続くというような感じではないでしょうか。かつての「中欧」Mitteleuropa に表れたような、ドイツが当然に支配すべき地域だという考え方は、もう現在ではないように思いました。

——先生がいらっしゃった 1960 年代から 70 年代というのは、先生の身近な研究者とか関係者で、旧東欧に対するそういった政治的な色を感じることはあったのでしょうか？

それは難しい問題ですね。私の指導教授は前述〔本部 8 頁〕のレーヴェンタールでした。レーヴェンタールというのは名前からしてユダヤ人ですが、彼は 1930 年代まで共産党員でした。それから社会民主党に移りましたが、共産党よりもラディカルな党員になりました。戦時中はイギリスに亡命して、戦後帰国して、社会民主党の最左翼を形成しました。その後ブランドに協力して、ブランドの東方政策 (Ostpolitik) の事実上の立案者と言われています。ブランド周辺に一連の外交活動家がありますが、それはほとんどレーヴェンタールの友人でした。

彼の講義はもうめっちゃくちゃ名調子の講義でした。惚れ惚れするような、正確な、美しいドイツ語でした。私が師事した時はもう 70 歳近くだったと思いますが、立派なものでした。講義がほとんど演説のような感じでした。学内だけではなくて学外からもたくさん聴講者が来ていました。ドイツの場合、大学の講義は学外者に開放されています。出席はまったく取りません。街の人も聴きに來ることが多いのです。よく言われるように、ヘーゲルとかハイデガーとかというドイツの有名な哲学者の講義は街の人がみな聴きに行ったものだと言われていますが、レーヴェンタールの講義もそういう感じでした。彼は私が行った頃にはもうすでに穏健な社会民主党員で、アジテーションするというような感じではありませんでした。どちらかといえば反共的となっていて、当時のソ連に対しては非常な敵意をむき出しにするような発言をしました。しかし、ただたんに反共ではなくて、ロシアとは正常な外交関係をもつべきだ、ロシアの支配は尊重すべきだという態度をとっていました。

オサチューク＝コラブという私が先に紹介した人物はウクライナ人で、かつほとんどポーランド人もあって、第二次世界大戦後ドイツに亡命してきて、研究者というよりはジャーナリストとして活躍しました。先ほど言ったように彼のドイツ語は訛りがあるけれども正確なドイツ語でした。『ノイエ・チュ

ルハー・ツァイトUNG』紙に寄せる論文はどれも読ませました。何よりも私が驚いたのは、東ヨーロッパが自由になった後、彼の名前がどっと出てきたことです。東ヨーロッパの多くの国々で英雄扱いされるようになりました。それまでオサチューク＝コラブについて語ることがほとんど禁じられたような状態でしたので驚きました。それ以後はどの国でも大いに尊敬される存在となりました。

私が個人的に知っているオサチューク＝コラブは、ドイツ語に Spaßvogel（冗談好き）という言葉がありますが、まさに Spaßvogel でした。東欧研究所 Osteuropa-Institut の教師仲間と飲みに行くことがありましたが、彼が加わるともう一座がいつも笑い転げるような感じでした。次から次へと東ヨーロッパのアネクドットを紹介するのです。本当にもう笑わざるをえないような一口話がたくさんありました。見事なドイツ語でした。東欧訛りの、ポーランド語訛りのドイツ語でしたが、それがむしろアネクドットにピッタリなんですね。次から次へとはてしなくジョークを飛ばしました。印象的でしたが、はたして周囲の尊敬を受けているのかどうか分かりませんでした。彼は政治的にはどういう立場を取っていたのでしょうか。私はそれがいまだにわかりません。彼の情報源はポーランド共産党の中央委員会だという話がありました。なにかわからなくなるとポーランドに電話して情報を得ていたという話をしていました。ポーランドのどこに、まただれに電話をしていたのか。本当にそうだったのかどうか。よく分かりません。まあ、面白い人でしたね。

私はその研究所にいましたが、レーヴェンタールともオサチューク＝コラブとも個人的にあまり親しくなることはなく、むしろロシア研究者のフィリップ教授〔本部 9 頁〕に非常にお世話になりました。指導教授は一応レーヴェンタールになっていましたが、彼は東欧研究所ではなく、前述のオットー・ズーア研究所という別の研究所の教授でした。そこが政治学部だったのです。私は一応政治学研究者として行ったので、レーヴェンタールを指導教授にせざるをえなかったのですが、実際に通ったのは東欧研究所の方でした。そこでヴェルナー・フィリップとその弟子の人々に非常に可愛がられました。なぜロシア史をやらないのだと言われました。本当はやってもよかったなという気持ちもありました。

——伊東先生がワルシャワに行かれた 1960 年代後半から 70 年代は、ワルシャワが廃墟から復興していった戦争の傷跡も生々しかったということを当時感じられたのでしょうか。チェコの知識人にインタビューされたという話ですが、この方々はいわゆる「異論派」、後に「憲章 77」とつながってくるような人たちだったのでしょうか？

正直に言って、ドイツを経験してポーランドに行くと貧しいなという印象でした。そして、戦争の跡があるなという感じはしました。でも、私は別にそれで、ポーランド人はなさけない奴らだなどとはまったく感じませんでした。よく耐えてここまで来たものだと思います。戦後にソ連からの搾取

にも遭ったわけですから、その中でよく生活を維持しているなという印象を持ちました。

それからずいぶん経って、私の早稲田大学でのゼミ生がポーランドに行ったときに、本当になさけない国だという印象を書いてきました。つまり、西ドイツの繁栄を見た後にポーランドに行くと、あまりにもみすぼらしすぎると。体制転換も終わって経済発展もしていた途中でしたけれども、それでもやはりポーランドの景色は貧しい、と私にメールで書いてきました。なので、それは今でもそのような印象があるのではないのでしょうか。

ただ、私が最初に行ったのは、1969 年だと思いますが、その頃はそんなに生々しい戦争の跡はもう見ませんでした。もう既にそのようなものは片付けられていましたから。旅行者にすぐ目に付くような形ではなかったと思います。とくに私が行ったのは、ワルシャワやポズナンやクラクフでしたので、そのような大学があるような都市ではもう戦災の跡は、戦後 20 年もたてばほぼ消えていたのではないのでしょうか。

チェコ人の異論派の話ですが、私がいたころはまだ「憲章 77」の運動はありませんでした。私が会ったのは「プラハの春」で敗北したチェコの知識人で、まだまとまった抵抗運動をしているような印象はなかったです。1968 年の暮れからプラハに行き始めたのですが、2、3 年の間は非常にリベラルな、まだ寛容な雰囲気が残っていたような、寛容というのはおかしいですが、プラハに行ってもまだ反体制派的な発言をしているような大学の先生が残っていました。1970 年代の最初の 2、3 年の間に段々と排除されていったのではないのでしょうか。

当時から私は佐々木和子さん〔本部 19 頁〕に連れられて、そういう人々と会ったことがあります。最初の 1、2 年の間は大目に見られていましたが、だんだんと地位から外されてゆきました。ポーランドでは見られない現象ですが、大学の先生が掃除夫、窓拭きになったりするのですね。知識人が知的な職業にはもう就けなくなって、非常に苦勞している状況がプラハにありました。

それは少し驚きでした。ポーランドでは、昔からシュラフタと農民との位の差が大きかったせいで、大学教授というのだいたいシュラフタの末裔みたいな感じですから、大学教授をやった人が掃除夫になるなんてことはありえないという感じでした。チェコはもともと農民の国だったところから来ているのでしょうか、知識人の側でもそういうデグラデーションを受け入れていました。受け入れているというとおかしいですけど、それもありうるという感じでした。ミラン・クンデラの映画化された有名な作品『存在の耐えられない軽さ』で描かれているような、掃除夫に成り下がった知識人がいました。それに気づいたのは随分後になってからです。

ただ、私が行った 1968 年、69 年の頃はまだほとんどの知識人が職場に残っていて、だんだんと冷たくされつつあるという感じでした。私が行った、佐々木さんに紹介された知識人の夫婦は、自宅に招待してくれて長い会話をしたのですが、どこで働いているかということは聞けませんでした。多分もう、労働者か何かになっていたのではないかという印象でした。ただ、労働者になっても当

時の社会主義国では給料は大学の先生とほとんど変わらなかったの、ほぼ同じような住宅に住んでいたのだと思います。

——社会主義時代のチェコなどの話を聞いていますと、反体制派の先生が職を追われるという正常化時代の話をよく聞きますが、ポーランドでは反体制派的な先生方もずっと仕事に残っていたのですか？

私も統計データなどで把握しているわけではありませんので、ただ個々の例で知っているところでは、ほとんどの知識人が残っていました。ワルシャワ大学とか、科学アカデミーとか。科学アカデミーはソ連では高い権威を誇りましたが、東欧諸国ではそれほどでもありませんでした。多くの国では科学アカデミーは事実上第二次世界大戦後、共産党政権の下で作られ、発展しました。したがって、権威の上では科学アカデミーよりも大学の方がはるかに高いです。大学では一度教授になるとほとんど絶対的な地位でした。誰も舐めにできませんでした。政府は異端的な教師が学生に影響を及ぼすことを恐れていましたので、そういう教師をできるだけ科学アカデミーに移すようにしていました。そのため社会主義体制が終わりを迎えるころは、科学アカデミーはかなりの程度反体制派のたまり場になっていました。

当然、出版界は少し難しいですね。ただ、たとえば、知識人向けの週刊誌の編集チームなどはほとんど変わっていません。週刊誌毎に編集方針や編集水準が少し違っていました、ずっと同じチームで編集していて、当局の方針が厳しくなると批判的な編集者が少し発言を抑えとか、目立たない場所にまわされるとかがありましたが、罷免されることは滅多にありませんでした。たとえば『ポリティカ』誌などは1957年に創刊されて以後、編集陣、執筆陣がほとんど変わっていないです。なんと体制変動後も変わっていません。

これとちょっと違う問題はユダヤ人問題です。反ユダヤ主義は戦後ずっとありましたが、とくに目立ったのは1968年の「三月事件」のときです。たとえば、百科事典の編集部から大勢のユダヤ人が追放されました。他の出版社、雑誌社からも追放されたように思います。追放されたユダヤ人は就職先がなくて、やむを得ず亡命することになったのはよく知られています。1万3千人から2万人が亡命したと言われています。

比較政治学者としての自分が最も影響を受けたのはポーランド出身のプシェヴォルスキ²⁷でした。ただ、プシェヴォルスキは私が留学したときに知った学者ではまったくなくて、帰国して、それもスラ研時代ではなく、早稲田大学に来てから読み始めた学者です。皆さんはプシェヴォルスキをご存じて

²⁷ アダム・プシェヴォルスキ Adam Przeworski (1940-)。ポーランド出身の政治学者。専門は、政治経済学、政治体制論、民主化研究。プシェヴォスキ、シェヴォースキーと表記されることもある。ワルシャワ大学卒業、1966年にノースウェスタン大学で博士号取得。シカゴ大学教授、ニューヨーク大学教授など。

しょうか。

民主化のメカニズムを解明しようとした研究者で、ポーランドについて研究を始めて、事実上全世界の政治変動に手を伸ばして論じています。英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語などヨーロッパのほとんどの言語を使いこなし、数理政治学の方法で政治変動を分析しています。「分析的マルクス主義者」を称しています。知るのは遅かったですが、比較政治学者として彼の書いたものに深く影響されました。彼の論文は何度も繰り返し読んでいます。本というよりも論文です。書いたものを片っ端から読んで、大きな影響を受けました。私が最後に大きな影響を受けた学者だと考えています。彼は歴史学者ではなくて純粹の比較政治学者です。現在の私にとって一番の、なんというか「思想的な源泉」となる研究者だと思っています。世界的なインパクトを持つ研究者ですが、残念ながら彼の学問のポーランド的なバックグラウンドはあまり知られていません。

本人が書いたものを読むと、アメリカに留学して、そのままアメリカに残りました。なんでもワルシャワ大の学生だった 1960 年代にアメリカ人がやって来て、いろいろ議論したときに面白いことを言う奴だというので奨学金を紹介してくれて、アメリカの地方大学に留学したのだそうです。これを信ずれば、亡命したのでもユダヤ人として迫害されたのでもないようです。私の知るかぎりどの著作でもそれについて語っていません。しかし、1960 年代後半はポーランドで政治的迫害やユダヤ人迫害が強まった時期ですので、それに嫌気が指して米国に渡ったのかも知れません。

1990 年代に私がゼミ生を連れてワルシャワのユダヤ人墓地に行ったとき、たまたま 1 人のゼミ生がプシェヴォルスキ家の墓を見つけました。私の記憶では最後の死者が葬られた記録があるのはたしか 1937 年でした。2000 年代にプシェヴォルスキが来日したときに、ワルシャワのユダヤ人墓地のエピソードについて話したところ、ひょっとすると自分の祖母の墓かも知れないと言いました。それほど深刻そうな顔でもなかったので、冗談だったのかも知れません。おそらくあまり自分の出身には拘ってはいないのでしょう。ポーランドの家系図辞典を引くと、「プシェヴォルスキ」はユダヤ系どころか、『ポーランド紋章一覧』(*Herbarz Polski*, 第 1 部 15 頁参照)に載っているほど著名な、古い貴族の家系で、三つの大きな系譜があるのだそうです。そのうちの一つの系譜であるのか、あるいはそれとはまったく別の、しかし同姓のユダヤ人の家系であるのかはいまだに分かりません。ポーランド東部に「プシェヴォルスク (Przeworsk)」という古い小都市があるので、そこ出身のユダヤ人ということかも知れません。

——東ドイツでも同じような状況だったのでしょうか？

いや、東ドイツはチェコスロヴァキアに近い状況だったのではないのでしょうか。東ドイツでは大学教授がすぐに肉体労働をさせられたという話を聞きませんが、あり得たと思います。東ドイツとチェコ

スロヴァキアはかなり体質が近かったですから。文化は違いますが、体制の体質が似ていたように思います。東ドイツでもそういうケースはおそらくあったと思いますが、西ドイツに逃げるという手もあったので、あまり目立たなかったのでしょう。ただ、ポーランドで起きたような反ユダヤ主義の爆発のような出来事は東ドイツにはありませんでした。おそらくそれには住民の中でユダヤ人が占める割合が非常に小さかったことも関係していると思います。

私は、(留学から) 10 年ぐらい後の 1983～84 年に、ベルリン自由大学の講師に招かれて 1 年間講義したことがあります。そこに出席していた学生の 1 人が東ドイツからの亡命者でした。ライプツィヒ出身で、熱心なクリスチャンで、ルター派プロテスタントのディシデントだったように思います。教会を中心に活動していたようです。東ドイツにいた頃は学生でしたから働くような立場ではありませんでした。したがって、そういう労働経験はなかったかと思いますが、西ベルリンに来てからの彼の態度を見ていますと、知的で、意志堅固な人間、言論人にとどまっていて、大学の先生とか作家とかそういう仕事を目指していて、肉体労働者になるとは想像できませんでした。知識人でありながら労働者になるような人間が東ドイツにもいたのでしょうか。

ただ、東ドイツの場合は、ポーランドのように大学の先生が神様みたいに尊敬されるという状態はなかったです。西ドイツの大学人は、ポーランドよりは弱かったですが、東ドイツと比べると非常に偉かったです。尊敬されていました。同じドイツとして、ドイツの伝統を引き継ぐ国として、東ドイツでも大学の先生が大事にされたのかもしれませんが、それほどでもなかったのではないかという印象が濃いです。そういう点では、ポーランドの方が、知識人を大事にするというか、知的権威を温存する傾向が古くからあったように思います。

ポーランドで社会主義の時代にいったん大学の助手、講師、教授などに任命されて政治的な見解や活動のゆえに地位を外されるという例がなかったとは言いませんが、あまり知りません。多くはそのまま職に留まることができました。最近の例としてはリプシツ (Henryk Lipszyc, 1941-) というのちに駐日大使になった日本学者がいます。私は彼が大使となる前から個人的に知っていました。彼は「連帯」運動の前に 1978 年にワルシャワ大学日本語学科の助手となりました。仕事はアカデミックな仕事というよりも、日本語＝ポーランド語辞典を作ることでした。しかし、ほとんど仕事をしませんでした。1980 年に「連帯」運動が興ったときに、彼はワルシャワ大学に「連帯」労組支部を作りました。仕事をしなかっただけではなく、共産党政権にも背を向けたのでした。にもかかわらず臆にはされませんでした。指導教授を知っていますが、彼を臆にはできませんでした。そして 1991 年には「連帯」政府によって駐日大使に任命されたのです。

リプシツは名前が示すようにユダヤ系です。ユダヤ系は一般社会では迫害されましたが、ワルシャワ大学では必ずしもそうではなかったようです。例外的なのは 1968 年の三月事件です。ゴムウカが名前を挙げて攻撃した 5 人の著名教授がワルシャワ大学から追放されました。全員がユダヤ系では

ありませんでした（たとえば、コワコフスキ Leszek Kołakowski, 1927-2009）が、多くはそうでした。これ以外に共産党時代にワルシャワ大学からユダヤ系の教員が追放された例を私は知りません。

——キェニェヴィチ〔第1部23頁〕が第二次世界大戦の後にマルクス主義論を勉強し始めたように、ポーランドの歴史学界はマルクス主義を戦後になって受容します。ただ、使えるところは使って、イデオロギーにどっぷりつかるといふ雰囲気ではなかったと思うのですが、チェコスロヴァキアの学界状況とか、ドイツの学界状況とかと比べてポーランドではイデオロギーとの距離は違ったりしていたのでしょうか？

チェコスロヴァキアや東ドイツの状況はあまり分からないのですが、ポーランドに関して言えば、マルクス主義を受け入れたという人はどのくらいいるのでしょうか。私が知っているヴァリツキ〔本部22頁〕は、科学アカデミー総裁だったギエイシュトル〔本部22頁〕という人からスラ研に来たときに聞いたのですが、父君を知っているが、ワルシャワ郊外のお城の殿様だったというのです。そういう家系なのです。ヴァリツキ自身から聞きましたが、戦争末期、14歳のときにワルシャワ蜂起が起きました。「私はワルシャワ蜂起に参加したくてしょうがなかったのだけど、母親に止められて参加できなかった」というのです。非常に悔やんでいました。蜂起に参加するのは当然だった、貴族の息子として蜂起に参加しないというのはありえないという考え方でした。

戦後はどうしたかといえば、マルクス主義にはまったく関心がなかった、共産党にも関心がなかった、しかし、大学には行きたかった、大学で行ける場所はどこかと思ったら、ロシア文学科しかなかったというのです。これがまた面白い話で、それ以外のところは、彼のような封建貴族の末裔はお断りという時代だったので、行けなかったというのです。それで彼はワルシャワ大学のロシア文学科に入って、ロシア思想史の研究者として有名になりました。

だから、最初から彼は共産党を心からバカにしていました。何というか、そういうちっぽけな連中を見下ろしていたという感じです。ティフのことを一度話しましたが、「あのティフか」といった感じでした。「最近読んだが、なかなかいいことを書いていたよ」などというのです。私は彼の口吻から明らかに軽蔑していることがわかりました。共産党の下働きをしているちっぽけなインテリだという感じで扱っているのです。それは、私にとって非常に印象的でした。

第二次世界大戦後、大学の入学資格がソ連式となって、入学試験で入ってくる学生と、地方の共産党書記が推薦してくる学生とに分かれました。ワルシャワ大学の場合には、正規の入学試験で入ってくる学生の方が優勢でした。優勢というか彼らの方が知的、道徳的な権威をもっていて、党の推薦で入ってきた連中を圧倒していたということです。これはよく聞きました。そういう話を知っていたので、スラ研にウッチ大学から来た学生がいて、こういう話を聞いたことがあるがどうだと聞

いたら、まったく嘘だということです。自分が知っている限りでは労働者組織の推薦で入って来た連中の方が結局は頑張ってよく伸びるのだと言うのです。少なくとも自分が卒業したウッチ大学ではそうだったということでした。要するに、昔の支配階級のなれの果ての奴らがわれわれをバカにしているのだ、そういう逸話を作っているのだと怒りをこめて語っていました。彼はおそらく労働者組織の推薦で入ってきた方なのでしょう。彼は理系の学生でしたので、彼がよくできる学生かどうかは知りようがありませんでした。

私はいまだによく分かりません。労働者や農民の子弟を優先的に大学に入れる共産党政権の措置が成功だったのか、不成功だったのか、いまだによく分かりません。

——知識人、大学教員の立場が高かったこととシュラフタの権威を考えると、社会主義国家として理念上は労働者や農民の国というか、平等が建前だった一方で、実態はそうではなかったということでしょうか？

これは先の話にも関わりますが、やはり古くからの社会的権威というものが、ポーランドの場合は意外と強く残っていて、それと新しい、共産党の支持を受けた下からの人々との間の妥協の形で共産党政府が成り立っていたような気がするのです。それで古くからの権威はだんだんと衰えていったのかもしれませんが、やはり最後まで生き残って、共産党によって支えられた権威もあるところまで行くと、古くからの権威に頼らざるを得ないというところがあったのではないのでしょうか。

アップルボームというアメリカのジャーナリストが書いた本によると、戦後東欧諸国では共産党がソ連に教えられた通りに労働者、農民の子弟に教育を施して、自分自身の知識人を作り出す方針をとったということです²⁸。ロシア革命時のロシアと違って、第二次世界大戦後の東欧諸国では比較的に教育水準が高かったので、私はそれほど成功しなかったのではないかと、教育されるべき知識人はすでに別のルートで育てられていたのではないかと思ったのですが、著者によると、たとえば戦後知識人のリーダーの1人となったラコフスキ（『ポリティカ』誌編集長、共産党政権最末期の首相）とか、民主化をリードしたキシュチャク内相などは、典型的に戦後教育の産物だそうです。しかし、ラコフスキやキシュチャクがそれほど広く権威をもったかどうか私には分かりません。

私は最近、共産党の文書などをよく読むのですが、やはり古くからの権威を持っている人々の支持を得たことが嬉しいということ、共産党の中で話し合っているのですね。彼ら自身コンプレックスがあるのです。権力を握っているのは彼らでしたから、そんなことを考える必要はないのに、内部で話し合っているところでそういう態度を示しています。だから、1989年に彼らは権力から去る

²⁸ アン・アップルボーム著、山崎博康訳『鉄のカーテン——東欧の壊滅 1944-56』白水社、2019年、2巻。なお、アップルボームはのちに外務大臣となったシコルスキ (Radosław Sikorski) と結婚してポーランドに住んでいる。

わけですが、もう最初から負けているという感じでした。精神的には負けているという感じが強かったです。ただ、それでも共産党の40年の支配は、私は決して無ではなかったし、多くのものを残していると思います。

社会経済体制としては戦後のポーランドはやはり社会主義だったと思います。これにはいろいろな要因が影響していると思います。よく言われているように、ポーランドでは19世紀半ばに封建支配層、つまりシュラフタ出身者の人口割合が10%近くに達していて、ヨーロッパの中でも例外的に高かったです。プルスの小説『人形』のストーリーが示すように²⁹、新興のブルジョワジーは権威と魅力の点でシュラフタ出身者に遠く及びませんでした。はたして20世紀半ばに共産党がそのシュラフタを倒して「労働者と農民」の国家を作ることができたかどうかという問題です。

私は成功したところもあるし、失敗したところもあるように思います。ロシアや中国のように労働者や農民の予備軍が圧倒的に大きかったところでは、共産党が政権をとれば「労働者と農民の国家」を樹立するのは比較的容易だったでしょうが、ポーランドのようにそうではなかった国ではいろいろ苦労がありました。首都と地方でも違いがありました。おそらく共産党が一番苦労したのはワルシャワではなかったでしょうか。ワルシャワではシュラフタ出身のインテリが大きな比重をもっていたし、威信もありました。しかし、地方では必ずしもそうではなく労働者・農民出身のインテリを作り出すことにある程度成功しました。

ただ、時代によって共産党政権の浮沈が激しかったです。「連帯」革命以後、共産党政権が大きく揺らぎました。しかも最後の10年間はシュラフタ出身の軍人が最高指導者となりました。ヤルゼルスキは共産党員でしたが、シュラフタ的な価値観を体現しているような人物でした。当時の世論調査が示すところでは、彼の政策は正しかったと考える者が国民の多数を占めています。彼の人気も時代とともに変わっていますが、おそらく歴史に残るだろうと思います。

というわけで、ポーランドは社会主義の半世紀にも拘わらずシュラフタの影響力を抜くことができなかったように思います。

——世界遺産に詳しい人たちの間では、第二次世界大戦後のワルシャワの街の復興が総力を挙げて行われたことが良く知られていて、今のポーランドの文化政策でも売りにされている部分があるようです。ご留学当時にワルシャワを訪問されて現地の人から誇らしげに語られた体験はあったのでしょうか？

それはたしかにありました。しかし、西ヨーロッパとか、プラハとか、そういう街を見た後でワルシャワに行くと、これで復興できたのかという印象が強かったです。つまり（ワルシャワの）旧市街と、ヴィ

²⁹ Blesław Brus, *Lalka*, 1890, 関口時正訳『人形』未知谷、2017年。

ラヌフという昔の国王の別荘があったところまで貫くヴィスワ川沿いの長い街道があるのですが、その両側に官庁の建物とか宮殿とか公園とかが立ち並んでいて、全部あわせて7~8kmの部分はなかなかよくできていると思いますが、そこは昔から観光街だったのですね。人々が住んでいるのは、今は文化宮殿が建っているあたりだったようです。その少し北側には昔ユダヤ人街がありました。ゲットーもありました。ユダヤ人は戦前ワルシャワの人口の三分の一を占めていましたから、人口の中の比重が大きかったです。そういう地区の方が本来の生活の場だと思っている人々は、戦後のワルシャワはどこか張り合いがないというか、とってつけたような感じがしたのではないのでしょうか。

プラハには何度も行きましたが、プラハを見た後でワルシャワに行くと、ワルシャワは張り合いのない都市だなと思いました。今は少し良くなっているかもしれませんが、今でもプラハとかブダペシュトに比べると観光資源としても貧しいような気がします。

考えてみると、ほとんど破壊しつくされたのですから、その中でよくやったと思います。それは大変な努力だったと思います。それは褒め称えたい。そして人々がそれを自慢するのもよく分かる。しかし、その自慢の観光街も私がよくワルシャワに通った時代には貧しかったです。王城というのがあります。旧市街の入り口のところに赤い建物が建っています。その近くに「ジグムントの柱」という高い柱頭が建っています。私が最初にワルシャワを訪れたときは、王城はありませんでした。それでギエレクのときになって、「ポーランド人もやればできる (Polak potrafi!)」という標語を作って、当時としてはものすごい金をかけて王城を復興しました。いまそれが立派に建っています。

その時に反体制知識人は「ギエレクはわれわれをバカにしている」、王城を復興して何のためになるのか、国民経済にまったく役立たない、あんなものにお金をかけて国民的支持を得ようと思っている、ギエレクはけしからんという人が多かったです。でも、どうでしょうか。今行ってみると、復興してよかったなと私は思います。

私は名古屋に近い三重県出身ですが、高校2年生のときに、名古屋城を再建するという話がありました。上に「金のしゃちほこ」が輝くあれです。まだ戦後10年ぐらしか経っていないときに、やるべきことがまだ山のようにあるときに、なぜ城郭のような今となっては無駄なものを復興しなくてはいけないのかが分かりませんでした。あんなことには、自分は反対だと声を挙げたこともあります。まだ高校生だったのでなんの影響もありませんでした、よく憶えています。

なんか少しそういう雰囲気がありました、ポーランド人の間にも。あんな王城の復活とか、旧市街の復活で国民を騙しているという雰囲気がありました。ただ、いま行ってみるといいなという感情があります。私もいま名古屋城を見ると、まあ復興してよかったなと思います（笑）。「尾張名古屋は城でもつ」と言いますが、そんな感じじゃないのでしょうか。

因みに現在のポーランドで戦後の共産党指導者の中で一番人気があるのはギエレクです。ゴムウカではなく、もちろんヤルゼルスキでもなく、ギエレクです。経済政策で大きな失敗をし、「連帯」

危機を招いた張本人ですが、それでも国民の間での人気は今でも高いのです。彼を主人公とする映画まで作られています。

6. 体制転換によってポーランドやロシア、ドイツで変わったこと、変わらなかったことについて、何を感じた／感じるか

私は西ベルリンという東ドイツ内の陸の孤島、事実上西ドイツという場所に合わせて5年暮らして、その間に頻繁に東ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキア、ソ連などを往き来しました。したがって、体制転換の印象は幾十にも重なって存在します。ドイツ、東欧諸国（ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー）、ソ連に分けて論じることになしましょう。この三者の体制転換はまったく異なるように思います。

【ドイツ】東ドイツが解体され、西ドイツがそれを吸収するという形を取りました。それは東ドイツの国名 Deutsche Demokratische Republik が消え、西ドイツの国名 Bundesrepublik Deutschland がドイツ全体を覆ったことに象徴的に現れています。東ドイツは国家としては解体され、大急ぎで以前あったいくつかの歴史的な州に再編されて、行政単位としてまだきちんとまとまってもいなかったのにそれぞれ別個に「連邦共和国」に加わりたいたいと申し出て、認められるという形を取りました。そうした体制転換方式のプラス面とマイナス面が統一後に表面化しました。東ドイツ民衆は東西ドイツのマルクを一对一で交換することを求めました。それを見て〔西ドイツの〕コール首相は一对一での通貨交換を実施することを決意しました。実際には東独マルクの購買力は西独マルクの五分の一以下でしたから、これはまったくのフィクションでした。実現すれば、消費者にとっては嬉しいかも知れませんが、生産者はただちに破産せざるを得ないでしょう。東ドイツの経済は弱かったのですから、弱いなりに通貨を守った方が良かったと思います。生産者はいわゆるエリートですから、貧しいけれどもエリートとしての矜持を保つことができたでしょう。つまり、東西ドイツが対等で一緒になることができたでしょう。しかし、彼らはその道を選びませんでした。つまり、エリートとしての矜持を捨てて、西に丸抱えされる道を選びました。西ドイツとしては、すべての負担を担ったのですからそれはそれで非常に負担の大きな道でした。けれどもコール首相は熟慮の上、財政負担を引き受けました。

統一後、東西ドイツ間で「制度の移しかえ (institutional transfer)」という現象が起きました。それは西ドイツの制度を系統的に東ドイツに移しかえるという作業です。東ドイツの経済は全体として破産を宣告され、中央に信託機構 (Treuhandaanstalt)、つまり破産管財事務所が設置されて、国有企業が競売にかけられました。競争力のない国有企業は安く買いたたかれました。東ドイツ出身者には資本蓄積がなかったのでそもそも手が出ませんでした。こうしてほとんどの東ドイツ企業は二束三文で西ドイツ出身者の手に渡りました。それは経営者だけではありませんでした。官庁、大学、

学校、企業、その他のポストが西ドイツ出身者の手に渡ったのです。たとえば、東ドイツの大学教員、裁判官、検察官、弁護士、会計士、税理士、技術者、医師、等々の資格はそのままでは認められず、再登録して西ドイツの基準を充たしていることが証明されなければなりません。たとえば東ドイツで歴史を教えていた人は西ドイツで歴史を教えられないわけですから、採用されませんでした。多くの人々は不合格となりました。こうして大量のエリートに入れ替えが起きました。それがある意味で、一対一でマルクを交換したことの対価でした。

こうした出来事は東ドイツ人に大きな衝撃を与えました。それはあたかも東ドイツの40年以上の歴史を帳消しにするような出来事という印象を与えました。このため「われわれの歴史を返せ」という運動が起こってきました。再統一後、東西の政党組織はキリスト教民主同盟／社会同盟 (CDU/CSU)、社会民主党 (SPD)、自由民主党 (FDP)、緑の党 (Grüne) などに再編されて、うまく再統合されるかに見えましたが、東独共産党（社会主義統一党 SED）だけは西ドイツ地域での提携先がありませんでした。このためその後身政党、民主社会党 (PDS) が次第に旧東ドイツ地域の政治的アイデンティティを象徴するようになりましたが、2006年以降は SPD 左翼と合同して「左翼党」を名乗っています。つまり、旧東ドイツ地域の代表者としての性格を弱めたのです。2010年代になると今度は右翼的な「ドイツのための選択肢 (AfD)」党が旧東ドイツ地域で次第に支持者を集めるようになります。その背景をなしたのは反 EU 感情と外国人労働者に対する敵意でした。それは旧西ドイツ地域でも一定の基盤をもちましたが、旧東ドイツ地域ではいっそう大きな支持を集めました。最近では旧東ドイツ地域を代表する政治勢力として「ドイツのための選択肢」が「左翼党」に取って代わるようになっていきます。旧東ドイツ地域では毎回の選挙で 10～35% のシェアをとっています。一番高いのは中部のチューリンゲン州です。2023年6月にそのゾンネベルク地区の首長選挙で AfD 候補が決戦投票まで進み、52.8% で当選しました。ドイツで最小の選挙区だそうですが、その勝利はシンボリックな意味をもっています。

他方で、西ドイツはどうなったか。私は西ドイツの動きを注視しているわけではないのでよく分かりませんが、私が西ベルリン滞在中に経験した「反権威主義」という改革の動きは下火になった模様です。それは主としてキャンパスで広がった運動でした。一つの例は大学自治の制度的改革です。私が在学中に「大学の三者対等 (Akademische Drittel-Parität)」という運動が広がりました。それは大学を構成する三者（教授・中間職・学生）が対等の立場で大学運営に参加するというものでした。これはヨーロッパの中世社会みたいな感じです。つまり、身分が決まっていて、その身分代表が全体を支えるという発想です。この改革は比較的うまくいくように見えました。日本では大学紛争が相次ぎましたが、大学運営については何の痕跡も残さずに消えてしまいました。ドイツでは少なくともこの改革を達成したと私は考えました。西ベルリンとハンブルグではこの原則に基づいて中間職の助手が学長に選ばれた。その後この運動は退潮に向かって、再び正教授の支配に戻っ

たようですが、形式上は「三者対等」原則が維持されています。

もう一つは、教授と学生の間で敬語を止めるという運動でした。生活習慣はなかなか変わらないものなので、この運動は真に革命的でした。多くの大学で、さまざまなレベルで、多数決で決議が行われ、敬語廃止が実施されました。学生が教授に対して Herr Professor とか Sie とかいうのを止めて、ファーストネームで duzen する（「おれ、おまえ」で呼びあう）というものでした。多くのゼミでは、学生が自主的にゼミ案を作成して、教授がそれに従って一学期間教えるということも行われました。私はこうした動きに驚愕し、どこまでそれが続くかを見守りました。私が西ベルリンにいる間、それは維持されました。しかし、1983～84 年に客員講師として戻ってきたときには沙汰済みとなっていました。duzenなんてありえないと学生に言われました。単にベルリンだけではなく、またドイツだけではなく全ヨーロッパ的に沙汰済みとなっていました。北欧から来ている女子学生に聞いてもやはり同じでした。自分はなんとか抵抗したが、2～3 年経つと止めてしまったと言っていました。一つの保守回帰の現象と言えましょう。

【東欧諸国】 冷戦時代の東欧諸国の状態がソ連という国のパワー・プロジェクションの結果であるということは、今日ほとんど異論がないでしょう。そのパワー・プロジェクションがいつごろ終焉を迎えるかについてはいろいろ議論がありましたが、ロシアは国力があつて政治体制も柔軟性に富んでいたもので、非常に長く、ほとんど半永久的に、半世紀か 1 世紀くらいは続く、と仮定していた者が、自分も含めて、多かったのはいまさらながら驚くべきです。しかし、それがいつかは起きるだろうということは、少なくともすでに大きな改革が起きていた中欧諸国（ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー）については、信じられていたように思います。

どういう方向にそれが起きるかについては、いくつかの手掛かりがありました。一つは過去、たとえば両大戦間期です。もう一つはこれら諸国における同時代の反政府運動です。そういうことを考えて、私としては両大戦間期史や同時代の反政府運動の動向にそれなりに注意を払ってきたつもりです。しかし、実際にはそうした予想はことごとく外れてしまいました。共産党時代に起きた地政学的、社会経済的変動によって戦前の政治勢力はほとんど息の根を止められてしまいました。また戦後の反政府運動は多かれ少なかれ共産党内の批判的知識人に導かれていましたが、それが 1970 年代以降影を潜めてしまいました。多くの日本の知識人はそうしたネオ・マルクス主義的な反政府運動に共感して幻想をもつ傾向がありました。ポーランドを例に取れば、1968 年以後ほとんどの知識人がマルクス主義と縁を切ってしまいました。知識人がマルクス主義を唱えることはなくなりました。1980 年の「連帯」運動には一度綱領草案に「社会主義」という言葉が登場したきりで、その後はまったく姿を消してしまいます。

過去も同時代の反政府運動も将来への手がかりを与えないとすれば、何がそれを与えるでしょう

か。私の考えではそれは西欧しかありませんでした。西欧はすでに政治的には民主主義として、経済的には市場経済として成功モデルを与えていました。加えて軍事的には NATO として、経済的には EU として国際統合を進めていました。東欧諸国にとってはこのモデルを我が物とし、国際統合に参入する以外にないと思われたはずです。東欧内でこれをリードするような勢力、反対するような勢力はどこにあったでしょうか。当然、与党勢力（ポスト共産主義勢力）が反西欧、野党勢力が親西欧と思われましたが、実はそれほど単純ではありませんでした。ソ連が解体傾向を示す中で、与党勢力は混乱し、多数派は親西欧路線をとるようになりました。頑固に親露的、反西欧的の路線を守る勢力はありましたが、急速に雲散霧消します。他方で旧野党勢力の大多数は当然親西欧路線をとりました。しかし野党はもともと組織的にまとまった勢力ではなかったのですぐに分裂を始めます。彼らの中から西欧に対して自己同一性を主張する勢力も登場することになります。いずれにせよ当面は同じ親西欧派でも旧与党出身者と旧野党出身者とは協力できませんでした。親露派にしても同じことが言えます。

かつてヘーゲルは東欧には「歴史的民族」と「没歴史的民族」がある、「歴史的民族」の名に値するのはポーランド人とハンガリー人だけだと言いました。ヘーゲルが意味したのは独立の国家を形成し、運営する能力ということだろうと思います。今日では東欧の大きな民族は国家をもっている、全部歴史的民族ですが、ヘーゲルがこれを語った当時はたしかにこの二民族だけでした。戦後冷戦時代にソ連の支配に実力で抵抗したのもこの二民族でした。いろいろ誤解を招いてきた概念ですが、東欧の脱社会主義化過程を見るとときも多少は役に立つかも知れないと思います。

東欧で体制変動が起きたときに主導的役割を演じたのもやはりポーランドとハンガリーでした。両国はドイツとロシアに対抗するために率先してヴィシェグラード協力を組織しました。そして NATO や EU 加盟を主導したのもやはりこの二国でした。面白いのは西欧統合を先導したのが、ポーランドにおいてポスト共産党勢力であったことです。彼らはあたかも過去の罪滅ぼしをするかの如くに NATO 加盟、EU 加盟への露払いをします。ポスト共産主義政党はその後没落して行きます（少なくとも当面は）。なお、ハンガリーではやや事情が違います。EU 加盟時はポスト共産党（社会党）の政権時でしたが、NATO 加盟はオルバーン首相の第一次政権時に当たります。

ポーランドでの体制変動の担い手はいうまでもなく「連帯」労組でした。最初の政府は円卓会議の合意に基づく政府、つまり「連帯」勢力とポスト共産主義勢力の合意に基づく政府でした。純粹の「連帯」政府が形成されたのは 1990 年代に入ってからで、それも長くありませんでした。90 年代半ばには純粹なポスト共産主義政府となっていて、その政府が憲法を制定し、NATO、EU 加盟を実現します。ようやくそのあとで、本当の意味でのポスト「連帯」政権、PiS（法と公正、カチンスキ派）と PO（市民政綱、トゥスク派）の政権が登場するのです。私は前者を民族保守政権、後者をリベラル保守政権と呼んでいます。両派の間で激烈な政争が繰り広げられたのはご承知の

通りです。

これに対してハンガリーの場合は一見ポーランドと似ているように見えてまったく違ってしています。ハンガリーには「連帯」運動に相当するものはありませんでした。共産党政権にとって替わったのは歴史的政党の流れを汲むと称する寄合所帯（民主フォーラムなど）で、まもなく政権をポスト共産党の社会党に引き渡します。そしてこの党がハンガリーを EU への道に導きました。この点はポーランドと同じです。しかし、ここでハンガリー独特の現象が起こります。それはオルバーンです。

オルバーンの政治的遍歴は波乱に富んでいますが、一つの傾向を示しています。大雑把にその道筋を辿りますと、①高校時代に学校の共産党組織の長となる。②大学で、共産党には批判的だが、社会民主主義的な綱領を掲げる青年民主同盟（フィデス）の創立者となる。③ソロスの奨学金をもらってケンブリッジ大学に留学する。④帰国後すぐ（1990 年）フィデスから国会議員に当選する。⑤1992 年にリベラル・インタナショナルの副議長となる。⑥2000 年に欧州人民党（保守的なキリスト教民主主義グループ）に加盟する。⑦2021 年に欧州議会内で最右翼をなす Non-Inscrits グループを作る。⑧2024 年にオーストリア自由党、チェコ ANO（「不満を持つ市民の活動」）、オランダ自由党、フランス国民連合などともに欧州議会内に新右翼グループを結成する。

見るとおり、共産主義→社会民主主義→自由主義→キリスト教民主主義（保守主義）→極右民族主義派という左から右への一貫した動きを見せています。第一次政権（1998～2002 年）は民主フォーラムや独立小農業者党との連立で、それほど右でも独裁的でもありませんでしたが、第二次政権（2010～26 年）は事実上単独支配となり、憲法改正をやり遂げます。基本的人権や民主的権利は維持しましたが、法の支配が大いに揺らぎます。オルバーンは正式に「非自由的」民主主義を唱えました。それ以上に驚くべきことは外交的志向です。オルバーンはウクライナ戦争が始まってから顕著に親露的な外交を展開し、それまで反ブリュッセルということで同盟関係にあった民族保守的なポーランドの PiS とも衝突します。2024 年 2 月にはポーランドで PiS に代わったリベラル保守的な PO とますます険悪な仲となっています。東欧の一角に親露的なハンガリーが出現し、それをスロヴァキアが支持するようになってソ連・東欧圏崩壊後の発展は一つの極に到達した観があります。もちろんそれは左翼ではありません。むしろ極右というべき位置づけとなっています。EU 加盟国の極右は多かれ少なかれ親露的、親プーチン的であって、ハンガリーのオルバーンはそれを代表する存在なのです。

それ以外の東欧諸国はどうでしょうか。私の視野は限られていて、風呂敷を広げると馬脚を露わすおそれがありますが（笑）、敢えていくつかの例を紹介しましょう。東欧諸国ではご承知のように必ずしも共産党政権に楯突いた勢力だけで体制転換後の政権が構成されたわけではありません。ポーランドなどではかなり厳しい「浄化政策」が実施されて、公的な地位に就く前に共産党時代の活動が吟味されます。これについてはポーランド国内でも多くの批判がありました。他方で、それ

が緩いというか、まったくくないような国もあります。たとえば、チェコの ANO 党首バビシュ (Andrej Babiš, 1954-) は共産党時代に秘密警察に協力していたといわれますが、比較的長く首相を務めることができました (2017~21 年)。ルーマニアではチャウシェスク時代の秘密警察 (セクリターテ) が名前を SRI (ルーマニア情報局) と改めて復活しています。共産党の後身は社会民主党を名乗り、だいぶ経ってからドラグネア (Liviu Dragnea, 1962-) という前科のある人物を指導者として仰ぐようになりました (2015~19 年)。法律によって前科のある人物は首相にはなれなかったのに、ドラグネアは下院議長職について自分の代理人を通じて国政を動かしました。いうまでもなくその際に旧セクリターテ (SRI) の能力も大いに活用しました。このように旧勢力が隠花植物のような形で復権した例もあります。

こうして東欧諸国は、ポーランドのトゥスク (Donald Tusk, 1957-) 首相やチェコのフィアラ (Petr Fiala, 1964-) 首相のような西欧的な自由民主主義の道を歩こうとする勢力と、ハンガリーのオルバーンのような非自由的民主主義を唱え、外交的にはむしろ親露的な路線を歩むことも辞さない勢力とに分かれようとしているかのように見えます。ヴィシエグラード協力は事実上崩壊します。体制転換前には想像もできなかったことです。

いずれにせよ、東欧諸国ではドイツ的な展開、つまり、国内にすでに成功例 (西ドイツ) があり、その助けを借りて統一、市場経済改革を達成するという展開はありませんでした。したがって、その結果としての「歴史を返せ」運動、右翼的な地域政党の発生、などという現象もありませんでした。東欧諸国は今回の変動において、自分自身で「歴史を作った」、自分たちは歴史の主人公となったと見えています。実際には彼ら独自の something new があったかというとはなく、西欧の政治体制、経済体制を引き移しただけだったように思いますが。他方で、西欧との違い、従って独自性を際立たせて、敢えて親露主義的な道を歩もうとする勢力も登場していて、それは政治的にはドイツの AfD に近い立場をとっているように見えます。

【ロシア】日本から訪れてもドイツやポーランドから訪れても、ロシアの多民族性には驚かされます。ロシアという国はその成立の当初から多民族国家であり、以後多民族帝国として発展してきました。

しかし、ソ連という国が登場したとき、不思議なことが起こりました。それは国家の名称の中に民族的であれ、地理的であれいかなる固有名詞も含まない、純粹に制度的理念からなる国家の成立です。歴史的にはそれ以前に「アメリカ合州国」がありますが、そこには「アメリカ」という固有名詞 (地名) が入っていました。ソ連は「評議会社会主義共和国連邦」の略称です。いうまでもなく「ソヴィエト」は固有名詞ではなく、「評議会」という普通名詞でした。ソ連が固有名詞を嫌ったのは、この国家が多民族の中のどれか一つの民族とアイデンティファイされるのを嫌ったからでした。名称は国家が民族的には中立的であるという理念を強く表明していました。

ソ連が崩壊したとき、旧ソ連共和国の連合体を「独立国家共同体 (CIS)」と呼びましたが、ここにも固有名詞が一つも使われていません。まるで国連のような名称です。この伝統はその後も引き継がれています。CIS の集団安全保障機構として「集団安全保障機構 (CSTO)」が設置されましたが、これも普通名詞のみからなっています。これとは別にユーラシア経済共同体 (EAEC)、のちにユーラシア経済連合 (EEU) という組織が作られましたが、このとき初めて「ユーラシア」という固有名詞が入りました。しかし、これは経済組織であって、主権とは関係がない、経済組織には固有名詞が入ってもかまわない、むしろ旧ソ連以外のユーラシア地域からの参加を歓迎したいという考え方が潜んでいたのかも知れません。

たしかにこのように国家名から固有名詞を排除しようとする執拗な努力が続けられましたが、ソ連が連邦構成共和国の境界線に沿って解体したことは大きな衝撃で、決定的な変化をもたらしました。連邦構成共和国の境界線は原則的にエスニックな住民境界線にしたがって引かれていたからでした。これ以後は国民国家が原則となるという宣言のようなものでした。一般に国家への帰属意識をシヴィック、民族集団への帰属意識をエスニックと呼ぶ傾向があります。実はシヴィックとエスニックとの間には多くのグラデーションがあって、一定の集団をどちらかと決めることは難しいです。国民国家はしばしば中心的なエスニック集団の名を冠したシヴィック集団といって良いでしょう。ロシアは帝国か国民国家かという選択を突きつけられたとき国民国家を選択しました。今日ロシアはだんだんと国民国家となりつつあります。ロシアにおいてエスニックなロシア人が占める人口割合は、フランスにおいてエスニックなフランス人が占める人口割合よりも大きくなっています。現在、フランスでフランス人が占める割合は五割くらい、ドイツでドイツ人が占める割合は七割くらい、ロシアでロシア人が占める割合は 82～83% くらいです。ヨーロッパでは移民がどんどん増えていますから、この格差は縮まらないでしょう。

ソ連のかつての連邦構成共和国はすべて独立し、民族共和国や民族自治区は残っているものの、分離権が否定されています。われわれが体験したソ連における体制崩壊は社会主義という社会経済体制が崩壊したことを意味すると同時に、多民族帝国が崩壊して国民国家となったことをも意味しました。前者は他の東欧諸国と共通ですが、後者はロシア（とユーゴスラヴィアに）独特です。今後はその影響が出てくるでしょう。ここではとくに後者に焦点を当てて、自分の印象を述べてみたいと思います。

多くの国は世界帝国から分離して国民国家になっています。イギリスのような島国は別にして、陸続きの世界帝国の本国が国民国家化するという例は非常に珍しいです。成功した例の一つはトルコでしょうが、トルコもいまだに世界帝国の後遺症に苦しんでいます（クルド人問題）。ロシアもけっして一挙には国民国家となることはできませんでした。ロシアは今日でも一定程度多民族国家としてとどまっています。実はロシア人自身が多民族性を誇りにしていました。ロシア人は国家の多民

族性を維持し、ロシア人以外の諸民族を助けるということに自らのアイデンティティを見出してきました。自分自身のためだけではなく、他の多くの民族のためにも働いているというのがロシア人の誇りでした。社会主義とはある意味で多民族世界帝国を維持し、発展させるための一つの方便でした。しかし、今日ロシアは国民国家であろうとしています。国民国家は同系の民族が多数を占めると仮定されていますが、実際には出身と関係なしに市民の同権が保障されている国家です。同系の市民が他の国民国家にいるからといって干渉することはできません。もしそれが許されるなら、ヨーロッパやラテンアメリカにおける国家体系はメチャクチャになるでしょう。

ソ連が崩壊して10年ぐらいの間、ロシア連邦外に取り残された何百万人というロシア人はほとんど不満の声を挙げませんでした。彼らはあたかも敗戦国の市民のようでした。その多くは異民族の地域に移り住んでしまったことに罪の意識さえ感じていました。かなりの数のロシア人が異民族地域（とくに中央アジア）から「本国」に引き上げてゆきました。居住地域の支配民族に同化しようとするロシア人も少なからずいました（バルト諸国など。バルト諸国の言語を覚えようとする）。さらに多くのロシア人がバルト諸国などで市民権を得た後、西欧諸国、米国、カナダ、オーストラリア、イスラエルなどに移住し、移住先に同化していきました。全体として「おとなしい少数民族」という印象がありました。少数民族問題を起こしたことはほとんどありませんでした。また、「本国」であるロシア連邦も外国あるいは外国となったかつてのソ連諸国における同胞の扱いにほとんど声を挙げませんでした。

しかし、プーチンが大統領になるころからそれが変化し始めました。最初是在外同胞の問題に国民の注意を喚起する程度でしたが、やがて「ルーシの世界」論——いろいろ解釈があって難しいですが、「ロシア語が通じる世界」というのが本来の意味と考えています——を唱え、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人は同一民族であると主張するようになりました。同一民族であるウクライナ人、ベラルーシ人は別の国家をもちたいとは主張できないと言い始めました。その発端が2014年のクリミア・ドンバス危機です。ロシアは軍事介入して、クリミアを併合し、ドンバスの親露的住民に武器援助をして、その反乱を助けました。これはかつての多民族帝国の理念とも国民国家の理念とも違っています。それはむしろロシア民族主義です。おそらくこの紛争は簡単には終わらないでしょう。実際に2022年にロシアはおおっぴらに国連憲章を犯して、ウクライナに侵入することになります。他の旧ソ連共和国はロシアの行動に怯えています。彼らのうちの一つとして、ロシアの同盟国であるベラルーシも含めて、ロシアによるクリミア併合を認めていません。また西側諸国もロシアの行動に反対し、現在ウクライナに軍事援助を行っています。

——オルバーンの政治的出自とその後の経歴についてどのようにお考えでしょうか？

今日の私の話はたいへん大雑把な話です。私が体験した三つの世界、つまりドイツ、東欧諸国、ロシアについてお話ししたのですが、それぞれについて大雑把な枠組があります。ここで東欧諸国についてだけまとめなおすと、体制転換後の再出発について、すでに40年以上共産党支配のもとにおかれていたので、共産党支配以前の伝統、両大戦間期や戦争中の抵抗運動の伝統にまで遡るのは難しいだろうと思われます。「独立小農業者党」の例はありますが、その影響は大きくありませんでした。そこで、それ以後の歴史の出発点として体制転換が起きた時点での体制側と反体制側の対立という単純な仮定を置きます。大状況はソ連が崩壊して無力となりつつあり、西側が政治的にも経済的にも成功して、ますます強大となりつつあるということですから、体制側も反体制側もまずもってこの大状況への対応を迫られます。それぞれに西側に追随しよう、いや踏みとどまってこれまでの伝統を守ろうという勢力が現れます。しかし、状況はそれぞれの国によって大きく異なります。ポーランドのように反体制の運動が大成功を収めた国もあれば、ハンガリーのようにどちらかといえば体制側が小さな成功を収めてきた国もありました。それ以外の諸国はどちら側も鳴かず飛ばずの受動的な状態であったように思います。

そこで、オルバーンが大雑把にいつどの辺りから出発して、体制転換後どのような政治的軌跡を辿ることになったのかというのが私の関心でした。はじめに断っておきますが、オルバーンが最初から大きな勢力であったとはまったく考えていません。どんな新しい政治勢力も出発点はささやかなものです。問題はその軌跡です。また私はオルバーンが最初から民族主義的、反西欧的、権威主義的であったとも考えていません。政治家は時代とともに徐々に変貌を遂げてゆきます。

私はやはりオルバーンの出発点を高等学校の共産党組織の長であったところに求めたいと思います。ハンガリーにはポーランドのような強力な反体制運動がありませんでしたから、有能な青年がまず共産党内に身をおいたのは自然だったでしょう。共産党内のどの派であったか、改革派であったか、保守派であったということを私は問うていないし、問う必要もないと思いますが、あえて問うならば主流派、つまり改革派でしょう。体制が崩壊しかかったときオルバーンはすでに共産党から離れていましたが、フィデスの当時の綱領は社会民主主義的で、共産党の改革派とそれほど違っていませんでしたといわれます。次に親西欧派としてイギリスに留学し、国際的な自由主義運動の指導者の1人にまでなります。そのあとは、キリスト教民主主義、つまり保守主義に転じ、少しずつ民族主義的、権威主義的となってゆき、「非自由的民主主義」を唱えるまでになります。最後に欧州議会内で最右翼に位置するグループの指導者の1人となります。その外交的オリエンテーションは、とりわけウクライナ戦争が始まって以降、顕著に親露主義に傾斜し、欧州政界において孤立します。

この政治的、思想的展開は私には理解できるものです。オルバーンは圧倒的な西欧の優越を前

にして、中央ヨーロッパ人として、自己の政治的、精神的平衡を保つために民族主義を主張すると同時に、部分的ではあれロシアの影響力に依拠せざるを得ないと感じたのではないのでしょうか。民族主義的なポーランド人もソ連が崩壊したあと、宿敵ドイツに対抗せざるを得ないと観念していました。どのようにドイツに対抗できるか。カチンスキ兄のような民族主義的知識人は EU というのはドイツが優勢を占めた神聖ローマ帝国の現代版だと言って憚りませんでした。しかし、それに対抗するために再びロシアと手を結ぶことが許されるだろうか。実はポーランド人にとってヴィシェグラード三国協力（のちの四国協力）は東のロシアに対抗すると同時に西のドイツにも対抗するささやかな努力でした。その間に NATO 加盟、ついで EU 加盟が実現したのでヴィシェグラードの比重は小さくなりましたが、それでも協力関係は続きました。ロシア自身と手を結ぶことにはポスト共産主義系でさえためらいがありました。PiS のカチンスキ兄などはロシアではなくアメリカと結んで、ドイツに支配されている（と信じられた）EU に対抗しようとしていました。しかし、それはうまくゆきませんでした。かつて「連帯」運動の最も急進的な指導者の 1 人であったコルネル・モラヴィエツキ（マテウシュ・モラヴィエツキ首相の実父）は、ロシアの選択肢を捨てるべきではないと主張しました³⁰。彼の立場は 20 世紀初めに帝政ロシアと結んだエンデツィヤのロマン・ドモフスキを想起させます。しかし、現代ではそういう立場をとるポーランド人は非常に少なくなっています。私はオルバーンのような政治的軌跡をポーランドの指導者について思い描くことができません。しかし、他の東欧諸国には少なからずあるのではないのでしょうか。むしろ一つの典型ではないかとさえ思います。

——体制転換直後のハンガリーの政治状況については、今改めて振り返ってどのようにお考えですか？

変動後の政治を動かしていった部分というと、変動後最初の連立政府を構成した民主フォーラム (MDF)、独立小農業者党 (FKgP)、キリスト教民主人民党 (KDNP) の三政党のことだと思います。いずれも戦前の政党ないし政治潮流の流れを引くと称する政党ですね。先に述べたように私は今回の説明枠組として共産党の政権奪取以前に遡る政治的伝統を無視しました。つまり、それは東欧諸国が長年の共産党支配によって過去との政治的連続性を失ってしまったという意味となります。これはやはり乱暴すぎたかも知れません（笑）。もちろん私が考えているのは長期的ではなく短期的な説明枠組としてです。長期的には、もちろんハンガリーだけではなくどの東欧諸国においても、たんに戦後初期、戦中・戦間期だけではなく、第一次世界大戦以前の歴史も現代に大きな影を落としていると思います。しかし、短期的には、とくに政治史、外交史においてはあまりにも共産党

³⁰ Paweł Kościński, „Kornel Morawiecki: Zbliżenie z Rosją wzmocni nas na arenie międzynarodowej,” *Gazeta Wyborcza*, 2018.7.14, <https://wyborcza.pl/7,75398,23673441,kornel-morawiecki-zblizenie-z-rosja-wzmocni-nas-na-arenie-miedzynarodowej.html> (2025.1.9 最終閲覧確認)

支配の影響が大きくて、しばらくは大きな歴史的背景を捨象して考察できるのではないかというのが私の趣旨です。実際にどの国においても歴史的な政党は体制転換期に復活しますが、ほとんどは名称においてだけであって人的な連続性は弱く、実際に影響力を及ぼすことができなかったように思います。40 年余という共産党支配の時代はあまりにも長過ぎ、またその変動はあまりにも根本的でした。国内にとどまった人々は牢獄で死ぬか、国内亡命のような形で余生を送らざるを得ませんでした。多くの活動家が国外に逃れましたが、ほとんど人的な連続性を維持することができませんでした。ですから、名称だけは復活したものの、有意味な連続性はなく、しばらくするうちに消えてゆくことになりました。

しかし、ハンガリーの場合は、少なくとも最初の数年間は、歴史的な政党の後継を名乗る政党が比較的活発に動きました。私はハンガリー近代史に明るくないのでたしかなことは言えないのですが、第一党となった民主フォーラムについて、これは「フォーラム」を名乗っているので、本来の政党ではなくていろいろな勢力の寄合所帯ということではなかったかと思います。その中の一つがたしか 19 世紀の農村社会主義の流れを引くと言われていますが、民主フォーラムの中でどのくらいの比重をもっていたのか、主流と言えたのかどうかは分かりません。寄合所帯だったので、リーダーシップがとりにくかったようです。この政党が独立小農業者党、キリスト教民主人民党と提携しました。独立小農業者党はいうまでもなく両大戦間期の最大政党、戦後も最初の選挙で第一党となった政党です。しかし、それだけに激しい弾圧に晒されました。キリスト教民主人民党も戦争直後の時期に活躍した政党です。しかし、いずれもどの程度実際に当時の政党と連続性があつたかは定かではありません。これら三党は共産党と妥協できるようなスタンスをとりました。その意味では他の東欧諸国におけるいわゆる衛星政党に近い性格をもっていたのではないのでしょうか。もう一つこれら三党の指導者は比較的年輩で、学生に毛が生えた程度の年齢のフィデスのような政党の指導者とは大きな世代格差がありました。それは当初は三政党に有利に働いたけれども、のちになって有権者に見捨てられる要因の一つともなりました。

というわけで、ハンガリーでは例外的に野党内の改革派が変動後の政治を動かしたことは認めますが、その期間は比較的短期に留まらざるを得なかったし、永続的な影響を残せなかったのではないかという気がします。

——2000 年代初めにポスト共産主義勢力が急速に衰え始めたというのは、ポーランドとハンガリーで共通しています。

これは非常に興味深い現象だと思います。ポーランドでポスト共産主義勢力が勃興してきたのは 1990 年代の半ば頃でした。大統領選挙でポスト共産主義出身のクファシニェフスキが二回連続して

当選し、議会選挙で一度敗れたものの、2001年9月の下院選挙でかつてない規模の議席数を獲得しました。ミレル首相は自信をもって政府を組織したのですが、まもなく同じポスト共産主義系の農民党が離脱し、少数内閣に転落します。この頃政権中枢を巻き込んだ数々の醜聞事件が発生し、2003～05年に与党議員が平均して数度犯罪や権力乱用で告発されるという異常事態となります。そのため大統領が政府に対して距離を置きはじめ、議会の多数派ではなく自身の個人的な信任のみに基づいた事務内閣を組織して事態を切り抜けました。それは何をやっても救いがたい状態で、あたかもポスト共産主義勢力の制度的生命力が尽きたかのようでした。2005年12月にクファシニェフスキ大統領の任期が終わったとき、すべてが終わりました。おそらく他の諸国でも似たような状態が起きていたのではないのでしょうか。ハンガリーが似た状態だったというのは興味深い話です。ハンガリーで民主フォーラム、独立小農業者党、キリスト教民主人民党などのいわゆる「歴史的政党」も社会党が没落するのと相前後して力を失っていったことも意味があるような気がします。彼らは他の東欧諸国における「衛星政党」と似た運命を辿っています。その他の東欧諸国の例も調べてみたいと思います。

共産党支配以前の旧政党の流れを引く勢力もダメ、共産党改革派の流れを引く勢力もダメということになれば、残るオプションはもうオルバーンの率いるフィデスしかないということになります。私のような外部者の目にはこれがハンガリーの現段階と思われます。しかし、どんな場合でも歴史の神は最後の言葉を語らないので、ハンガリーにおいても新しい道が開ける可能性は十分にあると信じます。最近は〔2019、2024年に〕ブダペシュト市長に選ばれたカラーチョニ (Karácsony Gergely, 1975-)、〔2024年の〕欧州議会選挙で好成績を挙げたティサ党のマジャル (Magyar Péter, 1981-) などがいます。ハンガリーでどのような新しい風が吹くのか興味津々です。

チェコはどうなのでしょう。チェコでも旧共産党（ボヘミア＝モラヴィア共産党）はまったく消えてしまいました。消えたというか、ずっとマージナルな勢力として政治の周辺に引っ込んでしまいました。ほとんど年金生活者の党になってしまったということも聞きます。また、旧共産党の支持者の平均年齢がどんどん上がってきて、70代後半ぐらいになっているという話もあります。ということは、物理的な生命力が終わりに近づきつつあります。強制的に排除されるよりはそういう形で消え去った方が仕合わせではないかと思います。

さればとって、1989年の体制転換の際に大きな役割を演じた勢力がいま勢力をもっているかというと、必ずしもそうではないようです。市場経済のなかで台頭してきた、旧体制と関係のない、旧体制に対する抵抗運動とも関係ない、まったく新しい勢力が台頭しつつあるような気がします。ポーランド的でもハンガリー的でもない、新しい傾向だなという感じがしています。

——1989年の体制転換時における与党内と野党内の西欧派の連携について、クラウス (Václav Klaus, 1941-) はどうとらえればよいのでしょうか？ 体制転換直後には、ハヴェル (Václav Havel, 1936-2011) とクラウスの間には短期間、市民フォーラムにおいて連合していた時期がありました。それが崩れて、市民フォーラムの右派が市民民主党 (ODS) にまとまっていきました。ハヴェルは知識人代表のような立場にいて、社会民主党 (ČSSD) は行き場のなくなった左派の受け皿として1990年代に成長しました^v。

クラウスに対応するようなタイプの政治家はポーランドにいません。一つだけ言えるのは、最初にポーランドの経済政策を担当したバルツェロヴィチ (Leszek Balcerowicz, 1947-) が共産党のど真ん中から出てきたことです。彼は共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所の所員でした (1978-80)。そこで社会主義経済の市場化の研究に取り組み、10年後に経済改革を実施しました。彼はアメリカ、イギリス留学の経験があって、市場経済の公式を取り入れました。しかし、彼が提携した相手は「連帯」派でした。これは非常に珍しいと思います。バルツェロヴィチは共産党のど真ん中から来たけれど、戒厳令のときに共産党から離脱しています。タイムラグがあります。共産党と手を切って、9年後に、体制転換後の最初の経済政策を担当しました。バルツェロヴィチは理論研究を行い、共産党と完全に手を切った上で、体制改革を実施しました。

クラウスの場合もバルツェロヴィチの場合も言えるのは、結局ブループリントはアメリカであるということです。すでに存在している市場経済のモデルを採用するということなので、新しい処方方を唱えるということではありませんでした。これが東ヨーロッパの改革の特徴だと思うのです。それまでは、たとえば労働者自主管理とかいろいろなマルクス主義の流れを汲んだ改革案が生まれてきましたが、1970年ぐらいになってそれがきれいに途絶えてしまっています。「連帯」労組が唱えたのは「自主管理共和国」であって、労働者自主管理ではありませんでした。そこにはたしかにまだユートピア主義の残滓が残っていましたが、社会主義の思想はもはやなく、前衛党が演じるべき役割もありませんでした。1989年になるとアメリカとかヨーロッパの既存の成功体験をそのまま引き写そうとする動きになってきます。それを象徴しているのがバルツェロヴィチであったり、クラウスであったりすると思います。そういう意味では「連帯」や「市民フォーラム」に集まった夢想論者とは違ってきます。

日本では東ヨーロッパで新しい実験が行われているのではないかと、マルクス主義かどうかはわからないけれども、日本の改革勢力もちょっとは参考にしてもよいような実験が行われているのではないかと、思われていましたが、実はそうではなかったのです。西ヨーロッパあるいはアメリカにすでにあるモデルをそのまま引き写した、そういう感覚で行われたというのが私の結論です。もちろん、それを彼らがやったわけですから、歴史の敗北者ではなくてむしろ歴史の勝利者だという意識は当然あるでしょう。しかし、なにか新しいものをやったということではないと私は思っています。

——ハヴェルが何をしようと思っていたのかは調べてみたいところですが、それ以外では先生のおっしゃったとおりで、その流れを確定させたのが EU の加盟交渉なのかなと思いました。

私にとってチェコが面白いのは、共産党がオーソドックスな共産党のままに留まって、ポーランドやハンガリーのように西欧化しなかったこと、共産化する前からの伝統を引く社会民主党やキリスト教民主党のような政党が復活したこと、ANO、海賊党のような市場経済の波に乗ったまったくの新興政党が強盛を誇っていることです。復活政党はどこでも弱いということを言いましたが、チェコでは例外的に強いですね。しかし、彼らは本当に旧政党と連続性があるのでしょうか。ČSSD はゼマン (Miloš Zeman, 1944-) という人気のある指導者を得て大きくなりましたが、ゼマンはもともと共産党出身ですね。キリスト教民主党については残念ながら知識がありません。しかし、真に驚くべきは第三の市場経済謳歌政党です。このタイプの政党は西欧諸国でも東欧諸国でも見かけないように思います。それだけにチェコらしさがよく現れているような気がします^{vi}。

EU に加盟したから親欧傾向が確定したかどうか。現在のカチンスキ兄とかオルバーンとかはどうかのでしょうか。彼らはどちらかといえば反 EU です。このままでうまくゆくのでしょうか。たとえば EU の (コロナ) 復興基金をハンガリーはもらえなくなり、ポーランドは条件付きとなっています。その金額は非常に大きいです。それなくしてポーランドやハンガリーはやってゆけるかどうか。その後ポーランドでは 2023 年 11 月の選挙で親 EU 派の PO が勝利したので、復興基金がもらえるようになりましたが、ハンガリーは復興基金だけではなく、他の補助金も失いそうです。ハンガリーとポーランドの間には一つの大きな政党システムの違いがあります。ポーランドでは与野党の勢力が非常に接近していて、いつ政権交替が起きても不思議ではない状態がずっと続いています。実際にそれは 2023 年末に起こりましたが、ハンガリーの場合はそれがありません。面白いのは「法の支配の代わりに予算支給」という EU の計画を実行したのが EU の法務委員のヨウロバー^{vii} (Věra Jurová, 1964-, 2019 年から 2024 年まで価値・透明性担当の副委員長) というチェコ人であることです。彼女はしばらく前 (2019 年) に『タイム』誌の「年の人」となりました。私は彼女の政策に数年前から興味をもって追跡しています。EU 中枢には意外にも東欧出身者がいて、それが EU の東欧政策を決定しているというのは私にとって非常に興味深いです。

私はウクライナ戦争の直前まで体制転換のときのポーランド共産党の動きを調べていました。みんな「連帯」の方にばかり注目してしまうので、共産党にどういう動きがあったかということを最近いろいろな文書が出てきて読んでいました。なかなか面白い動きがあったなと思っています。体制転換をやったのはひょっとしたら共産党だったのではないかという印象さえもつくくらいです。不思議な動きがありました。それをやはり公にしたいなと思っています。これはあまり研究されていません。

共産党のやることはどうせ分かっているという感じで誰も勉強しないのです。それを紹介しようとしたらウクライナ戦争が起こっていま中断していて、またそのテーマに戻れるかどうか不安です（笑）。

〔2024 年 10 月：脱稿〕

（以下、第 3 部に続く）

編集注

ii 「三月事件」とは、1968年3月にワルシャワで生じた警察と学生の衝突を指す。この事件を機に、知識人の追放や反ユダヤキャンペーンが展開され、ゴムウカが権力基盤を固めた。また、「十二月事件」とは、1970年12月に政府の値上げ政策に反対するグダンスク及びグディニヤの労働者が起こした抗議行動への弾圧を指す。この事件を機に、ゴムウカ政権は崩壊したとされる。

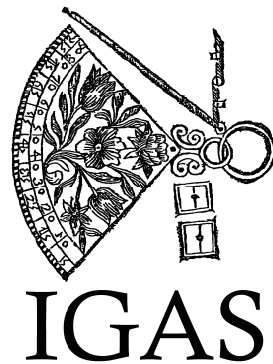
iii 本稿では、ポーランド統一労働者党 (PZPR) について特に断りがない場合、便宜上共産党と表記する。

iv ハプスブルク帝国期から戦間期のハンガリーにおいて、言語・文化的に一定数の「ドイツ系住民」が居住していたが、第二次世界大戦後に強制移動の対象となり、ハンガリーを離れた。山本明代『第二次世界大戦期東中欧の強制移動のメカニズム』刀水書房、2024年。

v クラウスは共産党政権期にアメリカ留学経験を持つ経済研究者で、1990年代には市民民主党 (ODS) を創設して新自由主義的な政策を推進した。1990年代後半から2010年代中盤にかけて、ODS 及びキリスト教民主同盟中心の政権と、社会民主党 (ČSSD) 中心の政権との間で数度の交代を経たのち、2017年にはバビシュ率いる「不満を持つ市民の活動」(ANO) 政権が誕生した。2021年にはODSが政権を奪取し、党首のフィアラ（歴史、政治史、政治学研究者としてチェコのマサリク大学の学長を務め、同党の政治家に転身した経歴を持つ）が首相に就任した〔2024年時点〕。

vi 共産党（ボヘミア＝モラヴィア共産党）は2000年代までは10%程度の得票率を示していたが、2020年代前半の支持基盤は主に年金生活者・高齢者に頼っており、ČSSDも力を失っている状態である。

vii チェコ語での読みは「ユロヴァー」に近い。



東欧史研究オーラルヒストリー vol. 2 伊東孝之氏インタビュー 第2部
東欧における体制転換——体験と思索
2026年9月25日 初版発行

編 者：東欧史研究オーラル・ヒストリー研究会

発行者：東京外国語大学 海外事情研究所
TUFS Institute for Global Area Studies
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
<https://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html>

ISBN: 978-4-909866-09-7

本書を無断で複写・複製することを禁じます。

ISBN978-4-909866-09-7



IGAS

東京外国語大学・海外事情研究所